

## 団地における母子保健に関する研究(第2報)

—昭和40年度厚生科学研究「母子衛生に関する特別研究」—

研究班長 副所長 内 藤 寿 七 郎

### I 緒 言

我々は昨年度即ち昭和39年度厚生科学研究「団地に於ける母子保健に関する研究」に於いて、若干の知見を得た。そこで今年度は団地の良い点悪い点、問題点や特殊性というものについて更に知ろうとして、一ヶ所の団地を全数調査した。

研究対象として選んだのは神奈川県所在の藤沢団地で

あり、全戸数は1,140戸である。我々は、母性保健部(渡辺次郎) 小児保健部(高橋悦二郎・松波昭夫) 栄養部(山内愛・佐伯美代子・福地節子) 教養部(星美智子・湯川礼子) 各研究部が協力調査し、次に示すような結果を得た。

### II 団地の産科学的考察

—母性保健の立場からみた藤沢団地の特徴—

#### 1. 調 査 方 法

今回は藤沢団地についての結果を報告する。

昭和41年、2月、我々は藤沢団地に出向し、該団地の有志の協力を得て、別掲の様な調査用紙を該当すると思われる約1,300世帯に配布し、記入されたものを回収して検討した。

回収は次の通りで、非常に良好ではあつたが、回答内容は次に示すように必ずしも適確でなく期待に添はないものも少なくなかつた。

a) 該当せず(未妊娠、当団地入居前の妊娠分娩など)	366名
b) 回答なし(未入居、長期不在、旅行など)	93名
c) 質問だけ寄せたもの	11名
d) 回 答 有	815名
計	1,285名

次に集計上困つた点について述べる。

a) 藤沢団地の開設は昭和37年4月であるにも拘らずそれ以前の年について記入されているものが可なりありこれは除外した。

b) 昭和37年4月以降に入居した人で、2回以上妊娠分娩しているにも拘らず、記載していることがら、何年のことなのか明らかでないものも可なりあつた。

c) 回答が2~3項目に限られており、回答に対する正確さの疑われるものも少なくなかつた。

そこで我々は、これらの回答を集計するに当り、次のような方法を用いることにした。

A 入居後、現在まで1回妊娠したものは、その経過について収録する。

入居後現在まで数回妊娠したものについては、最終回分についての経過について収録する。

現在妊娠中の者は、その経過を収録する。

その他記載が不備ではあるが、以上に準ずるものと認められたもの。

B 昭和何年についての記載なのか明らかでないもの。

2回以上娠しているが、何回目の事柄なのか明らかでないもの。

多少の推測を加えると以上に該当すると見なされるもの。

C AとBを併せたもの。

以下の統計は簡潔を旨とし、A及びCを中心として述べる。

なお、あとでみる如く、階層と異常発生率との間には密接な関係があるが、各世帯の所得には階層差はない模様である。

妊 娠 調 査 票

【まえがき】

妊娠分娩障害は一般住宅に比し、団地に多発し、然も高層になるに従つて、その率の高いことが指摘されています。母子衛生の見地から、これを調査し、団地の改善に役立てたいと思いますが、御協力戴ければ幸いです。

【記入方法】

妊娠回数1回の方は該当項目に○を、2回以上の方は、例えば昭和36年、昭和38年のことなら◎◎と傍に記入して下さい。

A 住 居

1. 住いは 階です。2. 階段の昇りと降りは併せて1日 回位です。
3. 不便、感じない、感じなかつた、感じる、感じた (どう云う点で )

B 妊 娠

1. 現在している、していない、嘗つてしたことあり (昭和 年, 年, 年)
2. 妊娠前半期 (6カ月以前) : 楽、少し苦痛、苦痛、不安
3. 妊娠後半期 (7カ月以後) : 楽、少し苦痛、苦痛、不安
4. つ わ り なし、なかつた、あり、あつた (軽、中、重)、治療あり、なし
5. 流産の危険 なし、なかつた、あり、あつた、予防出来た、出来なかつた
5. 早産の危険 なし、なかつた、あり、あつた、予防出来た、出来なかつた
6. 中 毒 症 なし、なかつた、あり  
あつた (むくみ、蛋白尿、高血圧、かゆみ、手のしびれ)
7. 人 工 中 絶 したことない、あつた (つわりのため、他の合併症のため、その他)
8. 母 親 学 級 受講しない、しなかつた、している、していない (病院、保健所、その他)

C 分娩産褥

1. 正常であつた
2. 異常があつた 鉗子、吸引、帝切、骨盤位、双胎、分娩遅延、出血多量、死産、回復が遅かつた
3. 場 所 病院、医院、助産所、自宅、実家
4. 無 痛 法 うけない、うけた (効いた、効かない)  
今後うけない、うけたい
5. 受 胎 調 節 やつている、やつていない、考えている、考えない

D 1 質 問

(何んでも結構です、お返事致します)

2 希望事項

2. 対 照

集計を掲げた。

a) 自宅群として昨年同様、昭和39年の愛育病院に受診した妊産婦のうち独立同居を有するものの病歴から

b) 一般対照群 (自宅、団地、アパート、マンション等を含む) としては、昭和40年の愛育病院の病歴からの集計を掲げた。

c) 昨年調査した、四つの団地（前原、柳沢、府中西原）の人数は109名という少数ではあるが、参考のため掲げた。

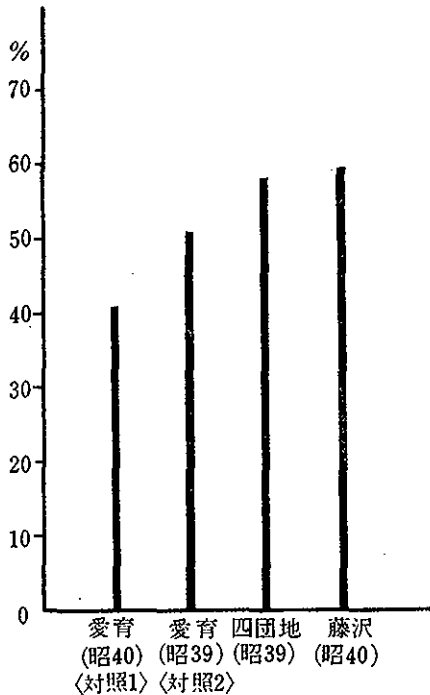
藤沢団地と対照群との比較を概観してみると、

1) 妊娠、分娩、産褥に伴う異常発生頻度は、愛育病院対照例、41%（昭和40年）、51%（昭和39年）、四団地は58%で、藤沢の59%が一番高い。（第1表、第1図）

第1表 年間患者発生頻度

	愛育	愛育	四団地	藤沢
	昭40	昭39	昭39	昭40
総数	902	714	108	405
患者	374	367	63	240
%	41	51	58	59

第1図 年間患者発生頻度

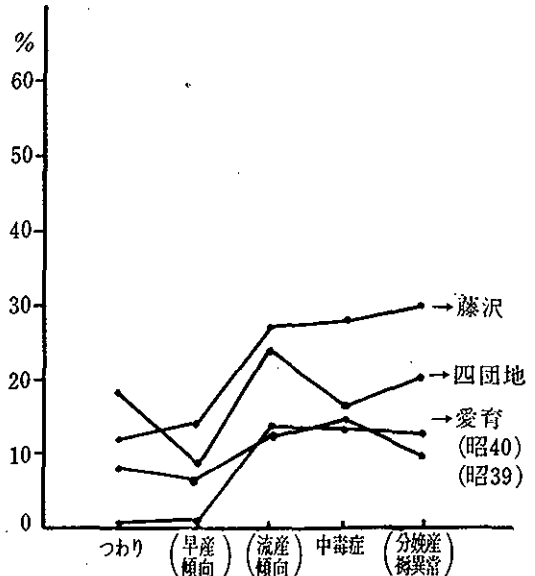


2) 各異常別（つわり強度、早産傾向、流産傾向、妊娠中毒症、分娩産褥異常）の比較では、流産傾向、妊娠中毒症、分娩産褥異常は、つわり強度と早産傾向より頻度が高い。又、各異常を通じ、愛育病院対照よりも、四団地、四団地よりも藤沢団地に於て発生頻度が高い。（第2表、第2図）

第2表 年間疾病発生頻度内訳比較

		つわり強度	早産傾向	流産傾向	中毒症	分娩異常	純褥常
藤沢 (A群)	総数	370	324	357	329	309	
	患者%	46 12	45 14	98 27	93 28	92 30	
四団地	総数	108	108	108	108	108	
	患者%	19 18	10 9	26 24	18 16.6	22 20	
愛育 (昭40)	総数	902	902	902	902	902	902
	患者%	5 0.5	6 0.7	122 13.5	125 13.8	116 12.8	
愛育 (昭39)	総数	714	714	714	714	714	714
	患者%	54 8	44 6.5	92 12.5	110 14.4	67 9.5	

第2図 年間疾病発生頻度内訳

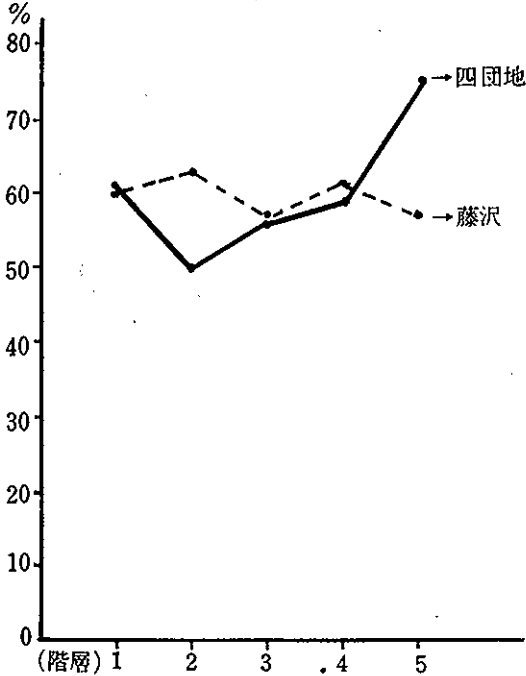


3) 階層別患者発生頻度については、藤沢団地に於ける平均は59%で、各階層との差は4%を越えない。四団地に於ては、平均58%ではあるが、1階を除いて、階層の高まるに従い頻度の高まる傾向が見られる。第3図

第3表 階層別患者発生頻度

		1階	2〃	3〃	4〃	5〃	全〃
四団地	総数	23	18	32	27	8	108
	患者%	13 61	9 50	18 56	16 59	6 75	63 58
藤沢 (A群)	総数	79	73	84	67	102	405
	患者%	47 60	46 63	48 57	41 61	58 57	240 59

第3図 階層別患者発生頻度



3. 建築構造の妊産婦に対する影響

建築構造上の不備、例えば、居住面積の狭小、天井の低いこと、昇降機のないこと、防音装置の不備などは特に感受性の強い妊産婦の精神と肉体に対し何らかの影響を与えているに相違ない。

この点を解明する為に我々は次のような調査を行った。

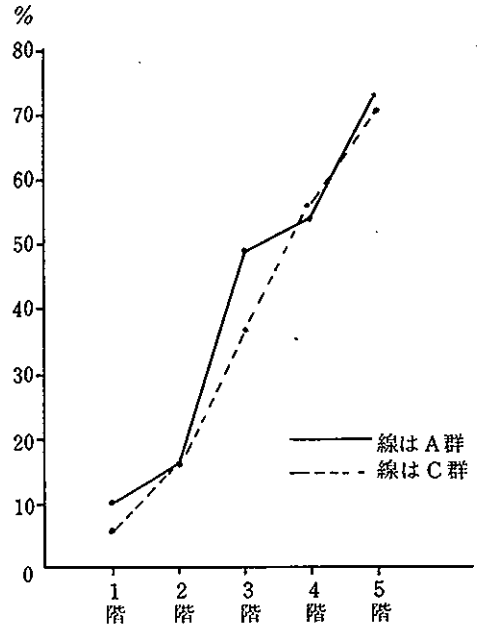
(1) 「生活上の不便を感じる」人がどのくらいいるか。

第4表 不便を感じる頻度

	1 階		2 階		3 階		4 階		5 階	
	感	不感	感	不感	感	不感	感	不感	感	不感
A 群	7	60	12	63	42	43	35	30	37	14
%	10	—	16	—	49	—	54	—	73	—
C 群	8	134	24	126	58	99	74	58	72	30
%	5.6	—	16	—	37	—	56	—	71	—

第4表、第4図は、これについて、階層との関係を示しているが、この関係は急角度の直線となつて現われている。つまり、それは、階層の高まりと共に「生活上の不便」を感じる人々が急速に増加していることを示すものに他ならない。第5階住居に於ては1回下に降りるのに

第4図 不便を感じる頻度



60段上下しなければならぬ。第5階居住の妊産婦の70%以上が、「生活上の不便」を感じているが、その原因はこれによるものと思われる。

(2) 妊娠について、どのくらいの人々が苦痛や不安を感じているか。

第5表、第5図は、その階層との関係を示している。ここでは、A群について見ると、1階25%、2階45%、3階55%と階層の高まりとの関係が明らかであるが、4階と5階とは横ばい状態を示している。

一般に3階以上の居住者の昇降回数は2階に比し、第6図によれば、急角度に減少している。3階以上の居住者で、「不安苦痛」を感じる頻度が横ばい状態であることと昇降回数の減少とは関連性がありそうである。つまり、階層の高まるにつれ階段の昇降が、負担になり、そのため自己防衛的に昇降回数は自然と減少す。昇降回数の少いことは生活上不便ではあるが、妊産婦にとって肉体的、従つて精神的な苦痛不安を幾らか和らげる。ということであろうか。

(3) 妊産婦の階段昇降回数

これについての回答は総数 678 枚あり、中、1階から5階までを通して1日1回昇降する人が32名、10回以上昇降する人が35名いる。5階に於て1日10回以上昇降する人が3名いるが、理由は明らかではない。妊婦が60段もの階段を1日、10回以上も昇降するとは一寸考えられ

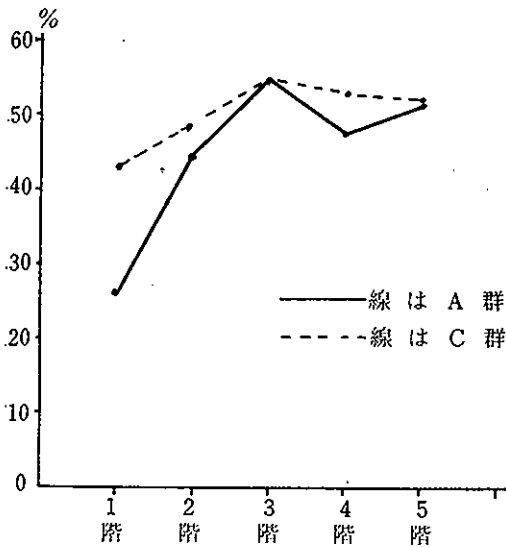
ない。或いは昇りと降りを別々に計算したのであろうかこの設問は紛わしい点を含むので、「外出何回」、或いは「地上に降りるのが何回」とでもすればよかつたと思う。

ところで、第5表、第5図によると2階居住者が、1

第5表 苦痛不安を感じる頻度

	1階		2階		3階		4階		5階	
	感	不感	感	不感	感	不感	感	不感	感	不感
A群	21	61	31	38	44	38	34	37	27	26
%	26	—	45	—	55	—	48	—	51	—
C群	70	93	71	73	84	69	74	65	56	52
%	43	—	49	—	55	—	53	—	52	—

第5図 苦痛不安を感じる頻度



日平均5回以上で、階層が高くなるに従つて回数が少しずつ減少して、5階居住者では3回以下となっている。この事実は前項で触れた「建築構造によりもたらされる障害」を妊産婦が、「行動範囲を狭める」ことによつて緩和しようとする意欲の現われと見なすことが出来る。

(4) 各階に於ける昇降回数動向

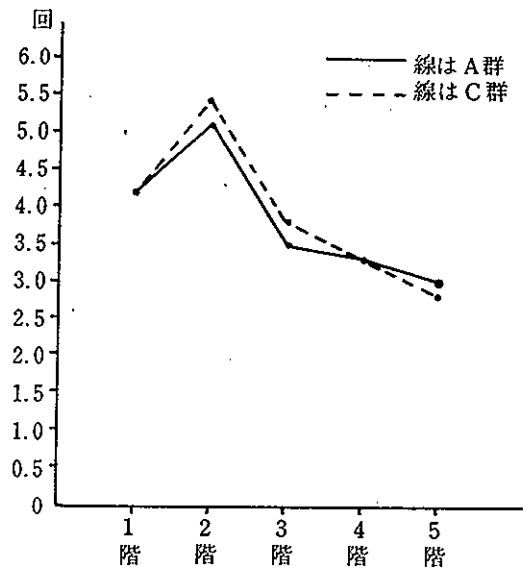
次に、各階に於いて妊産婦は1日何回位い階段を昇降するか。

詳細は第6表、第7表、を見れば1目瞭然だが、ここでは特徴的な事象を述べる。

第6表 階段昇降平均回数

		1階	2階	3階	4階	5階
A群	人数	53	77	88	74	54
	総回数 1人平均	220 4.2	390 5.1	307 3.5	245 3.3	160.5 3.0
C群	人数	107	155	143	146	108
	総回数 1人平均	460 4.3	789.5 5.4	548 3.8	484.5 3.3	311.5 2.8

第6図 1人の階段昇降平均回数



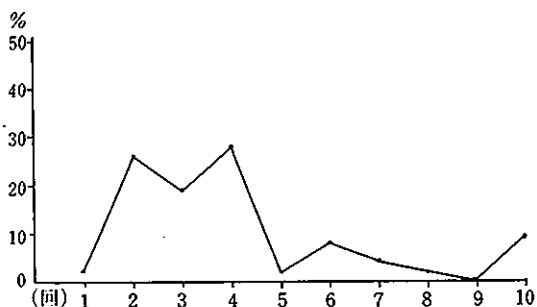
第7表 (1)A群の階段昇降頻度

回数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計	
1階	度数	1	14	10	15	1	4	2	1	0	5	53
	%	2	26	19	28	2	8	4	2	0	9	
2階	度数	0	15	0	25	0	24	0	5	0	6	75
	%	0	20	0	33	0	32	0	7	0	8	
3階	度数	4	30	15	20	4	8	1	1	1	3	87
	%	5	34	17	23	5	9	1	1	1	3	
4階	度数	5	25	13	21	2	5	0	0	0	3	74
	%	7	34	18	28	3	7	0	0	0	4	
5階	度数	6	23	9	9	2	4	0	0	0	1	54
	%	11	43	17	17	4	7	0	0	0	2	
全階	度数	16	107	47	90	9	45	3	7	1	18	343
	%	5	31	14	26	3	13	1	2	0	5	

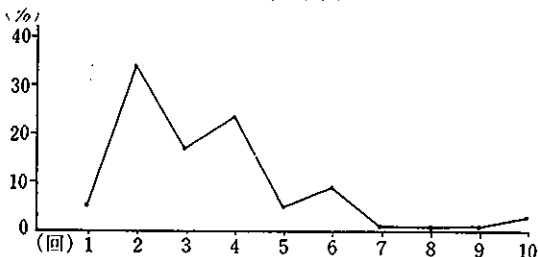
(2)C群の階段昇降頻度

回数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計
度数	32	101	96	182	25	94	4	18	1	35	678
%	5	28	14	27	4	20	1	3	0	5	

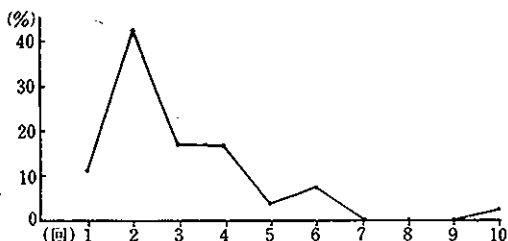
第7図-1 一階に於ける昇降頻度



第7図-2 三階に於ける昇降頻度



第7図-3 五階に於ける昇降頻度



1日2回の昇降群は、1階26%、3階34%、5階43%というふうに、これらの中で8~9%ずつ増している。

1日4回の昇降群は、1階28%、3階23%、5階17%というふうにこれらの中で5~6%ずつ減っている。

以上の関係は、第7図(1、2、3)に顕著に現われている。このことは妊産婦は、上層に居住するに従って昇降回数を減らしていることを示す。

#### 4. 妊娠、分娩、産褥異常の頻度

藤沢団地に於ては、2.の対照の項で明らかな如く愛育病院や四団地(柳沢、西原、前原、府中)に於けるよりも妊娠、分娩、産褥に伴う疾病の発生率は高い。

四団地に於ける疾病の発生頻度は階層によつて影響を受けているように見受けられるが、藤沢団地に於ては階層別の変化は、流産傾向、早産傾向、中毒症に於て認められる。(第8図参照)

##### (1) つわりの頻度

「つわり」は妊婦の80~90%に現われる(森山<sup>19)</sup>)と云われているが、この点に関して、藤沢団地の「つわり」の頻度は全く同様であることが、第8表及び第9図によつて明らかである。

図表を細かに検討すれば、軽度の「つわり」は階層の高まりと共に増加するが、中等度以上の「つわり」は、これに反して階層の高まりと共に軽度の減少を示す。

##### (2) 流産傾向(切迫流産と流産)

従来、自然流産の頻度は3~4回の妊娠に1回(岩田<sup>20)</sup>)、Schultze(1940<sup>21)</sup>)は21%、Diddle<sup>22)</sup>)は7.2%~11.2%と云つてゐるが、藤沢団地に於ては9%(A群)であり後者に近いと云えよう。

流産や切迫流産の正確な実態を統計的に知ることは一般に困難であり、外国文献がしばしば引用される。

藤沢団地に於ける流産傾向について考察するとき、流産そのものは階層の高まりと共に、なだらかに増加しているが、切迫流産と流産とを併せた流産傾向では、4~5階は1~3階に比し10%以上も頻度が高い。

##### (3) 早産傾向(切迫早産と早産)

藤沢団地に於て、早産傾向は14%(A群)を示す。階層別に見ると3、4階が1、2、5階に比して頻度が高い。

##### (4) 妊娠中毒症

頻度については、九嶋<sup>23)</sup>)により、正常妊娠46.7%、軽症中毒症45.8%、重症中毒症7.5%、森山<sup>24)</sup>)により、妊娠末期妊婦の15~20%、あるいはそれ以上ということが云われている。

われわれは調査用紙に単に「むくみ」と記入されているものも、中毒症に含めた、藤沢団地に於ける、このような中毒症の発生は28%(A群)、蛋白尿や高血圧のあるものは13%(A群)16.5%(C群)であつた。それ故、藤沢団地の頻度と一般の頻度との間には大差はない。

階層的考察では、階層の高まりに応じ、頻度が少しくつ多くなるが、5階に於てぐつと低下するのは、早産傾向に於けると同様、注目すべき点である。

##### (5) 分娩、産褥異常

この中には、帝王切開、鉗子手術、真空吸引法、骨盤位牽出術、分娩遅延、分娩に伴う多量の出血、産褥時の復故遅延、死産、双胎、早期破水、早産等が含まれる。

主な点を検討してみると、

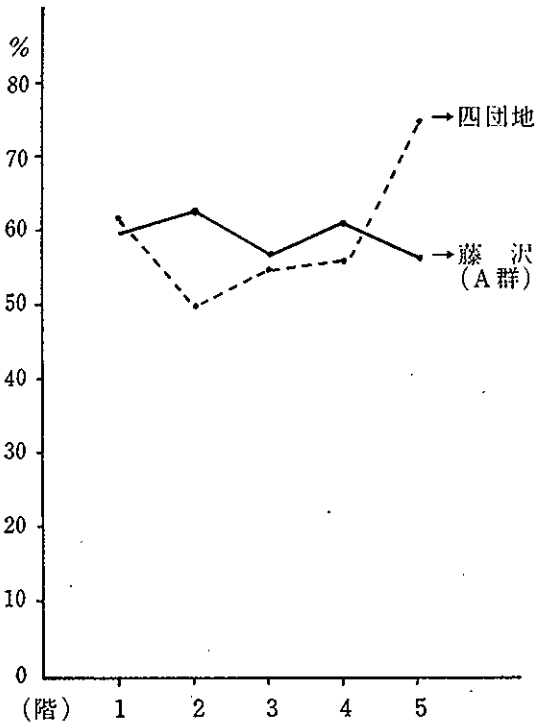
鉗子手術<sup>25)</sup>と真空吸引法は藤沢団地に於て多い。

第8表 妊娠、分娩、産褥異常の頻度

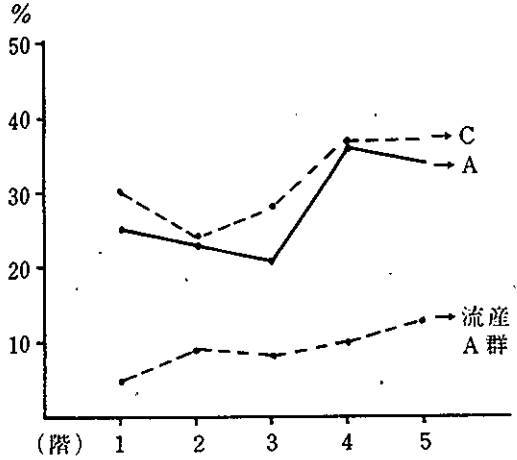
階	群	つわり					流産傾向				早産傾向				妊娠中毒症			分娩産褥異常			妊娠産褥分娩異常		
		強	中	弱	(-)	計	切迫(+)	(-)	計	切迫(+)	(-)	計	(+)	(-)	計	(+)	(-)	計	(+)	(-)	計		
1階	A群	4 %	32 %	33 %	16 %	85	16 %	4 %	61 %	81	6 %	0 %	66 %	72	21 %	56 %	77	23 %	46 %	69	47 %	79	
	C群	20 %	63 %	57 %	31 %	171	37 %	11 %	115 %	163	14 %	3 %	132 %	149	48 %	108 %	156	33 %	67 %	133	0.60		
2階	A群	14 %	26 %	23 %	12 %	75	10 %	6 %	54 %	70	2 %	3 %	61 %	66	20 %	47 %	67	14 %	51 %	65	46 %	73	
	C群	25 %	56 %	49 %	26 %	156	21 %	13 %	110 %	144	9 %	4 %	126 %	139	44 %	99 %	143	35 %	108 %	143	0.63		
3階	A群	18 %	23 %	28 %	17 %	86	11 %	8 %	65 %	84	11 %	3 %	63 %	77	25 %	57 %	76	25 %	48 %	73	48 %	84	
	C群	31 %	61 %	47 %	21 %	160	24 %	20 %	114 %	158	18 %	15 %	116 %	149	50 %	94 %	144	47 %	96 %	143	0.57		
4階	A群	6 %	23 %	27 %	16 %	72	18 %	7 %	44 %	69	11 %	5 %	51 %	67	21 %	41 %	62	16 %	41 %	57	41 %	67	
	C群	17 %	53 %	47 %	25 %	142	33 %	20 %	89 %	142	20 %	12 %	103 %	135	48 %	83 %	131	38 %	90 %	128	0.61		
5階	A群	4 %	13 %	24 %	11 %	52	11 %	7 %	35 %	53	3 %	1 %	38 %	42	6 %	41 %	47	14 %	31 %	45	58 %	102	
	C群	13 %	34 %	41 %	17 %	105	31 %	7 %	66 %	104	11 %	2 %	78 %	91	23 %	74 %	97	28 %	67 %	95	0.57		
全階	A群	46 %	117 %	135 %	72 %	370	66 %	32 %	259 %	357	33 %	12 %	279 %	324	93 %	236 %	329	92 %	217 %	309	240 %	405	
	C群	106 %	267 %	241 %	100 %	714	146 %	71 %	494 %	711	72 %	36 %	555 %	663	213 %	458 %	671	196 %	446 %	642	0.59		

内藤他：団地における母子保健に関する研究（第2報）

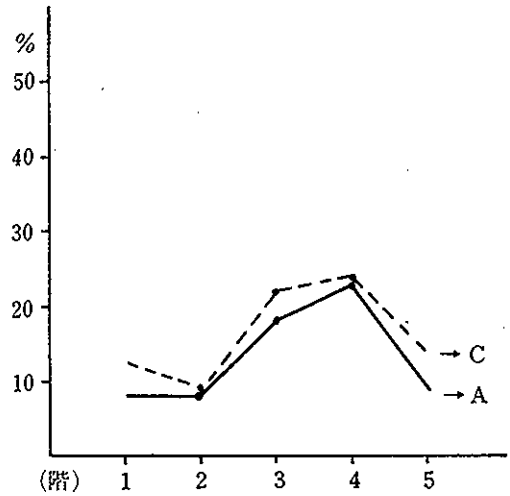
第8図 妊娠、分娩、産褥、異常



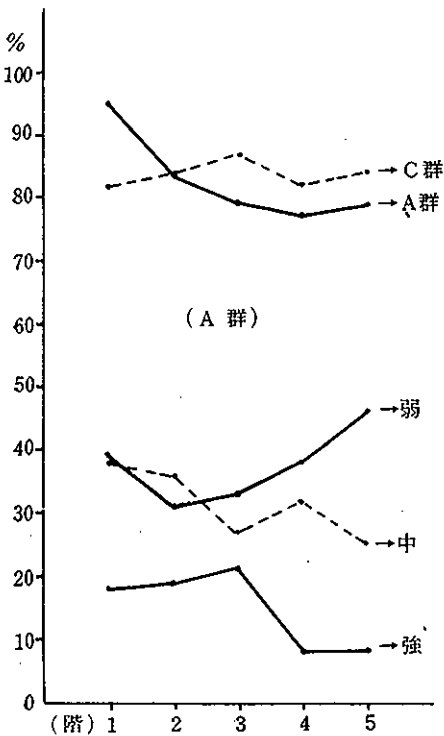
第9図-2 流産傾向



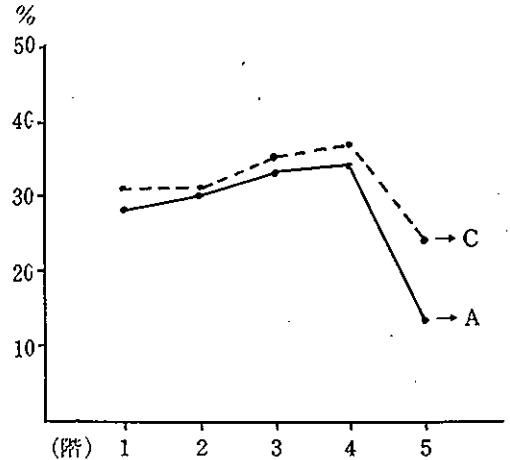
-3 早産傾向



第9図-1 つわり頻度

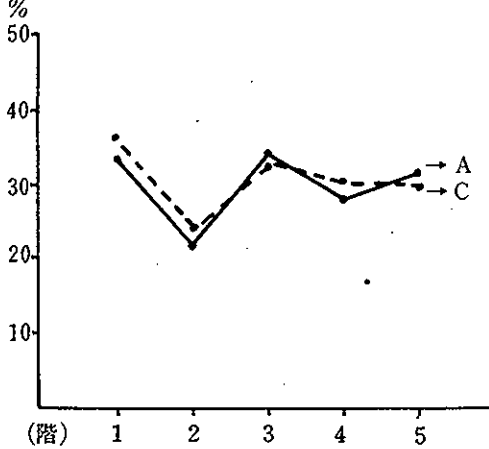


-4 妊娠中毒症



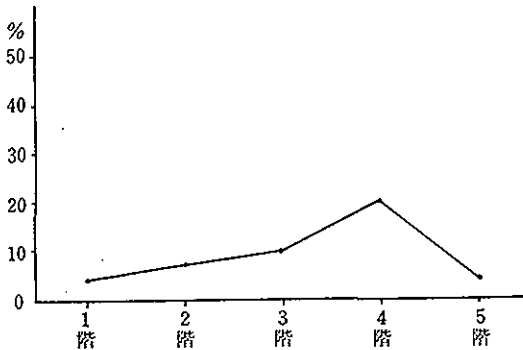


第9図-5 分娩産褥異常



第9図-6

つわり及び其の他の合併症による人工妊娠中絶



帝王切開術<sup>8)</sup>は藤沢団地に於て一般頻度内にある。骨盤位牽出術も同様である。

分娩産褥異常の総計の比較では、藤沢団地の29% (A群)は愛育病院のそれ(昭和39年)の3倍であり、四団地のその2.2倍である。(第10表)

分娩産褥異常についての階層別変化では、1、2階に振幅が見られるが、3、4、5階では30%を中心にした軽い振幅が見られるのみである。

(6) 妊娠分娩産褥異常

妊娠してから産褥終了までの間に異常徴候のために治療を受けた人が、どのくらいいるか、この異常徴候の内容は今迄に掲げた、強度のつわり、流産傾向、早産傾向分娩産褥異常の範囲に限定した。

藤沢団地に於ては、この頻度は59%であり、階層別変化は著明でない。

これに対し、四団地に於ては例数の少いのが難点(109例)ではあるが、階層平均は57であり、階層差は下は50%から上は75%の間で認められる。

5. 妊娠分娩に関連した選択態度、および関心の動向

妊娠分娩という現象は、男児が欲しいとか女児が欲しいとかいう個人の主観を超えて、基本的には生物学的諸原則に従うところの生命発展の一過程である。この妊娠分娩の必然性に関連して人間の精神はいろいろのかかわりあいをもつ。現代文化の中にあり、且つ日常それに接している団地居住者の現在に於ける妊娠分娩に対する考え方や判断は以下の報告により、ある程度理解される。

(第9表、第10図)

(1) 母親学級

母親学級への出席が全体の30%に留まっていることについては原因を探究する必要がある。

(2) 受胎調節

受胎調節が90%も普及していることは、家族計画の普及運動が一応成功している例と見てよい、然し次に述べる様に、医学的適応以外の理由による人工妊娠中絶がなお20%あることは受胎調節の技術が未だ充分理解されていないことを示す。

(3) 人工妊娠中絶

これの経験者が30%あり、その3分2が医学的適応以外の理由によるものであるが、この事は、受胎調節の難しさを物語っている。

医学的適応による人工妊娠中絶が、5階を除外すれば1階より4階まで漸次その率が高くなっているが、これも疾患と建築構造との関連を物語るものであろうか。

(4) 分娩時無痛法

現在、無痛法が産婦に認容されていないことについては、それ相応の理由に基づくものと思われる。それには看護人員の不足を含めた管理上の問題、技術上の問題、忍耐強い民族性の問題などが挙げられる。

(5) 分娩施設

昭和32年、日本の施設内分娩は28.7%、施設外分娩は71.3%であることが報ぜられている<sup>9)</sup>。然し東京都では当時でも70%は施設内分娩であった。それから約10年経過した今日では施設内分娩は更に増加していると思われる。

藤沢団地に於ては99%は施設(病院、診療所、助産所)分娩であり、1%足らずの人が実家乃至自宅分娩をしている。

(6) ま と め

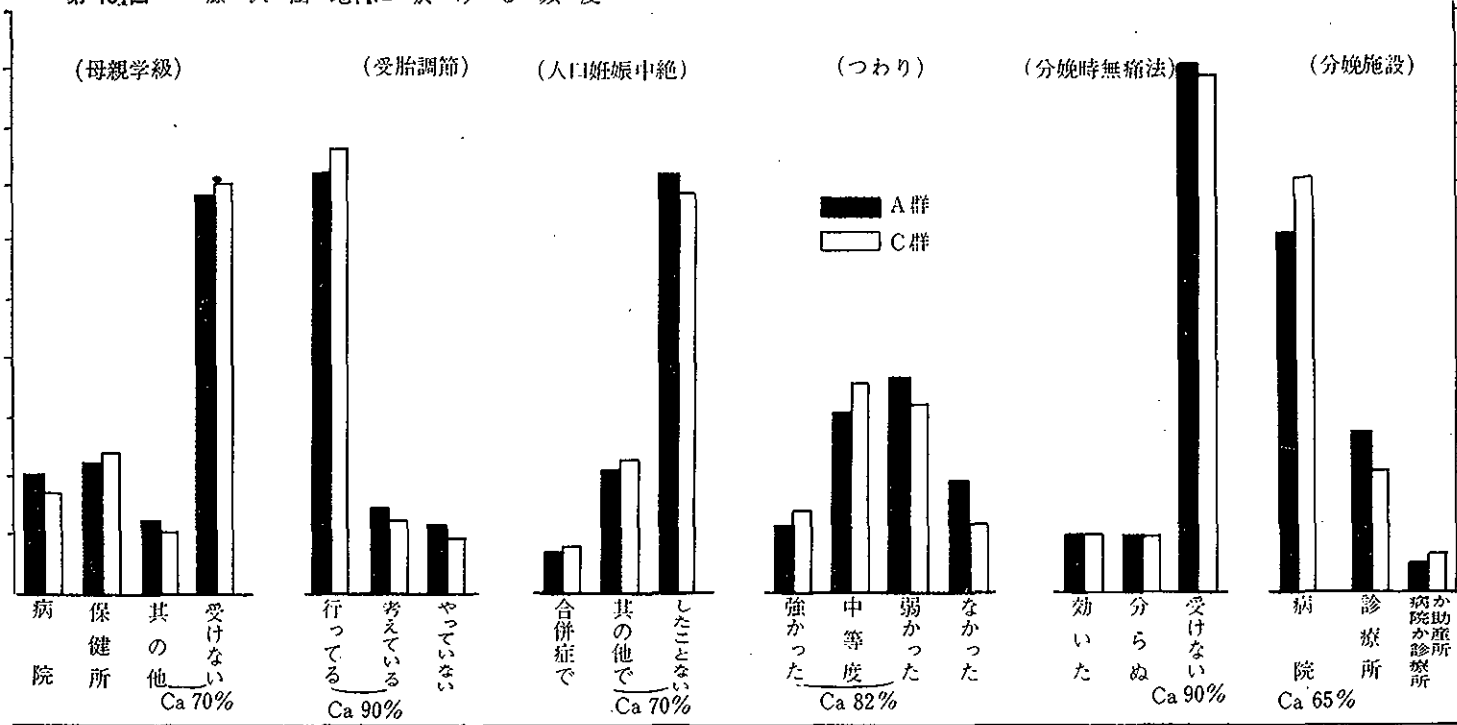
妊娠分娩に関連して特に選択態度の問題を取上げたのは次のような理由による。

「母親学級」の出席率は藤沢団地全体の平均では約30%、

第9表 妊娠分娩に関する選択態度

階	群	母親学級				受胎調節				人工妊娠中絶				分娩時無痛法				分娩施設								
		総数	病院	保健所	その他	受け	行	考	否	総数	合併	其	否	総数	効	不明	う	う	総数	病院	診療	不明	実自			
		%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%			
1階	A群	78	9	16	6	68	79	80	13	8	78	4	18	77	75	4	8	88(7)	77	68	29	3	0			
	C群		9	15	5	70		83	9	8		7	26	67		5	4	91(13)		70	24	5	1			
		157					164					161					155					163				
2階	A群	69	13	13	4	70	70	76	14	10	70	7	23	70	67	6	1	93(6)	69	86	10	5	0			
	C群		9	13	5	73		79	12	9		8	27	64		6	4	90(18)		90	7	3	0			
		140					148					142					141					147				
3階	A群	79	10	13	5	72	75	67	19	15	80	10	14	76	84	1	5	94(14)	73	63	23	4	0			
	C群		7	14	5	74		72	16	10		10	18	72		1	5	93(24)		65	25	8	1			
		144					144					149					144					156				
4階	A群	67	9	12	12	67	66	74	8	18	10	20	80	0	60	8	5	87(2)	61	57	34	7	2			
	C群		8	14	5	72		77	10	13		7	18	75		10	8	81(6)		62	26	11	1			
		98					137					137					120					131				
5階	A群	49	12	12	6	70	48	67	23	10	47	4	19	77	44	5	2	93(6)	46	54	37	9	0			
	C群		8	14	5	72		70	18	12		9	24	68		6	4	89(10)		60	28	9	0			
		98					100					95					96					98				
全階	A群	342	11	13	7	69	338	73	15	12	285	7	21	72	330	5	5	91(35)	326	67	28	5	0			
	C群		8	15	6	71		77	13	10		8	23	69		5	5	89(73)		71	21	7	1			
		679					693					684					656					695				

第10図 藤沢団地における頻度



1階	A群	68	93	72	83	88	68
	C群	70					
2階	A群	70	90	70	84	93	86
	C群	73					
3階	A群	72	86	76	81	94	63
	C群	74					
4階	A群	67	82	0	78	87	57
	C群	63					
5階	A群	70	90	77	79	93	54
	C群	72					

各階層の出席率も3%の偏差でこの値に近い(A群)。藤沢団地の場合、母親学級は集会所等で行われていないので、出席しようとするれば、距離の遠い保健所、病院・診療所、などへバス、電車で行かねばならない。このような場合、妊婦は「出掛けようか、どうしようか」と迷うに違いない。どちらかに意志は決定されるわけだが、その結果は各階層間に大きな差のないことを示している。

「受胎調節」についてみると、「行っている」、「考えている」の団地平均は約90%で、各階層のこれに対する偏差は4%の範囲内にある。

「人工妊娠中絶」について経験のないものの団地平均は70%で、各階層の偏差範囲は7%である。

「分娩無痛法」を受けないものの団地平均は約90%

で、各階層の偏差範囲は4%である。

「施設分娩」については、団地の99%の人が施設内で分娩している。病院、診療所、助産所の区分は現在多少流動的である。

以上この項で取上げた選択対象に対して働く心理状態には一定の傾向が階層とは無関係に存在することが明らかとなつた。

この論文の前段で、我々は階層と妊婦疾患の発生頻度との間に密接な関係のあることを解明した。これが母性健の立場から団地に於ける第一の特徴とすれば、ここで取上げた選択対象に対する妊婦の地域的反応(現代文化の吸収度合)の一定動向は団地の第二の特徴と云うことが出来る。

第10表 異常分娩

調査人員	内訳	鉗吸	子引	帝切	王開	骨盤位	出多	血量	産褥不全	分選	分娩	死産	その他	計
藤沢 309	A	33	17	12	5	9	6	3	5	90				
		10.6%	5.5%	3.8%	1.6%	2.9%	1.9%	0.9%	1.6%	29.0%				
同上 642	C	76	33	24	17	15	9	7	11	192				
		11.7%	5.1%	3.7%	2.7%	2.3%	2.3%	1.1%	1.7%	29.9%				
愛育(昭39) 714(自宅群)		27	8	15	2		8	5		67				
		3.8%	1.1%	2.1%	0.3%		1.1%	0.7%		9.3%				
同上(昭40) 902		65	5	26	7			5		116				
		7.2%	0.5%	2.8%	0.8%			0.5%		12.8%				
四団地(昭39) 109		3	6	5	2		2			14				
		2.7%	5.5%	4.6%	1.8%		1.8%			13.0%				
備考		3~4% (小畑)・7 鉗子のみ	2~5% (本邦)・8	5% (中島)							5.2% 28週以後の 対出産 (松尾)・9			

6. 質問と希望

正式回答 642 枚の中、質問と希望を寄せられた人は 139 名、約22%であり、その中産科関係は 131 項、人数比17%、小児関係は35項、人数比約5%であった。小児関係は小児専門医側で検討されているが、産科関係の内訳は第11表に示す如くである。この内容を要約してみると、

(1) 産科関係の重要な問題点は全部出し尽されてい

る。

(2) 今迄数字的に単に傾向として論じられてきた団地の問題点に深いメスが入られた印象を与える。即ち妊婦にとって階段の昇降が如何に苦痛であるかが明らかにされた。次に流産、早産についての苦い経験が語られている、更にそうしたことが、妊娠分娩に対する不安、恐怖に繋つてくるものであることも明らかにされた。これは妊娠分娩が本来生理的な現象であるにも拘らず、その期間に60%の人が、治療を要する異常または合併症に罹

っている事実に対応する。

(3) 以上、団地に於ける妊産婦の実生活にとって何が問題点であるのかが明らかにされた。従つて、その対策

第11表

質 問 と 希 望	131	前回、難産(鉗子分娩、骨盤位で死亡、出血で瀕死、帝王切開、早期破水後分娩遅延、高年で分娩遅延)であつたので、次回分娩に不安	11
○階 段 と 妊 娠 障 害	18	妊娠不安(習慣性流産、重症つわり、高年流産胎状奇胎、分娩育児ノイローゼ、30才以上)	8
5階	(9)	○妊 娠 中 毒 症	7
昇降後に腹痛	1	未熟児分娩、未熟児死亡など	2
早産、流産、死産などの連続	2	後遺症	1
買物籠を下げての昇降は無理	1	その他	4
3階以上にエレベーターを(特に妊婦、病人、幼児の為)	1	○疾 病	23
その他	4	月経不順	4
4階	(3)	掻痒症	5
買物帰りは苦痛	1	血液型不適合	1
エレベーターを	1	不妊(1~6年)	4
その他	1	その他	9
3階	(4)	○奇 形 と 薬 物	5
階段途中で荷物置きを	1	○団 地 内 に 施 設 を	16
同階層で最近3人流産	1	保育所、母親学級、小病院、健康相談、癌検診	
破水	1	その他	
その他	1	○家 族 計 画 と 受 胎 調 節	23
1階	(1)	無害、簡単な方法を	5
階段昇降は妊婦の敵	1	リングについて	5
○流 産、早 産	9	失敗(体温計、コンドーム、授乳中)	3
5階		週期のずれと荻野式	3
流産、切迫流産など	2	不順で不安	2
4階		不妊手術について(男性を含めて)	3
早産、流産	1	理想的家族構成とは	2
3階		その他	3
流産、切迫流産、習慣性流産	3	○其 の 他	11
2階		「調査の結果の発表を」、「分娩を健保で」、など	
流産、胎状奇胎、切迫流産、早産	3		
○妊 娠 分 娩 不 安	19		

## 7. ま と め

(1) 調査に対する藤沢団地の協力は非常に宜しく、調査票の回収はほぼ完全であつたが、適確に記入されていたものは約半数に止まつた。

(2) 団地に於て「生活上の不便」を訴える頻度は、1階10%、5階73%であり、頻度の増加は階層の高さに比例した。

(3) 妊娠中に「苦痛不安」を感じる頻度は、1階26%、3階55%で、1階から3階までの頻度の増加は、階層の高さに比例するが、3、4、5階の頻度には大差はない。

として取敢えず、保育所、母親学級、健康相談、小病院等の施設に対する要望の起つてくるのも当然である。

(4) 階段の昇降回数の最多は2階の平均5.1回、最少は5階の3回であり、それは階層の高さに逆比例する。

(5) 藤沢団地に於ける一番多い昇降回数は、1日2回であり、昇降2回は階層の高まりと共に増加する。

(6) 以上を要約すると、「階段の昇降は妊婦にとって重荷」であり、その荷重は階層の高さに比例して増大する。

(7) 流産傾向、医学的適応による人工妊娠中絶、早産傾向、後期妊娠中毒症は階層の高まりに比例して増加している。(但し藤沢団地の5階はこれに該当しない。)

(8) 藤沢団地に於ける分娩産褥時に於ける異常発生頻度の平均は30%であり、階層による特徴は見られない。

(9) 妊娠、分娩、産褥の期間を通じ、どの位の割合の人が異常を発生するかについての統計は今迄の所見当らない。今回の調査で藤沢団地約60%、府中、柳沢前原、西原団地の総合で58%、これに対し自宅居住の多い愛育病院では、昭和39年52%、昭和40年41%であることが判明した。

(10) 藤沢団地に於てA群(正確に記入された回答群で少は早産傾向の279名から、多は妊娠、分娩、産褥異常の405名に及ぶ)とC群(正確度のやや劣るものを含めた活用出来る総数で、少は早産傾向の663名から、多は「つわり」群の734名に及ぶ)とでは、その頻度は症状について、個別的にも、全体的にも非常に近似している。それ故、A群の統計を以て藤沢団地の全体を窺うことも可能と思われる。

(11) 藤沢団地の5階に於てつわり、流産傾向、早産傾向は一般に頻度が低下する。これは調査票の少いことと併せて、妊婦が5階を敬遠する傾向によるものではなからうか。

(12) 母親学級出席の30%という低さは、罹患率の高さに全然関係ないとは云えない。「質問と希望」欄に母親学級を集会所で開いて欲しいという切実なる声があつたところから察すると、今後この問題についての解決には明るい希望もてる。

(13) 受胎調節を行つている人及びそれについて考えている人が、合せて90%に達しているということは、家族計画の普及という点で、最良の成績と云えよう。然し、一面20%の人が未だ医学的適応以外で人工妊娠中絶を行つている現況から察すれば、受胎調節の理解にもつと努力が払われて然るべきである。

(14) 分娩無痛法に対する希望の案外少いのは技術や助産、看護人員の不足を含めての管理体制の不備及び忍耐強い民族性によるものと思われる。

(15) 藤沢団地では99%の人が施設で分娩している。これは建築構造上、当然の帰結と云える。

(16) 母親学級出席、受胎調節、人工妊娠中絶、分娩無痛法、施設分娩等については一括し、選択態度の動向として分析した。

藤沢団地に於て、これらについての頻度は、階層を超越して、一定の値を示している。即ち各階層は各項目についてはほぼ等しい頻度を示している点、非常に興味深い。

(17) 「質問及び希望」欄には団地住人の意欲が、かなり強く表現されている。これがまた統計内容に対してか

りの重みを加えた。

内容は

受胎調節と家族計画に関するもの	23
疾病	23
妊娠分娩不安	19
階段と妊娠障害	18
「団地内に施設を」の声	16
流産、早産に関するもの	9
妊娠中毒症	7
薬物と奇形	5
その他	11

以上の如くであるが、これらの声は統計結果を裏書きする貴重な記録である。よつて、母子衛生の見地から団地内に欠けている施設に対する要望に対しては正しく耳を傾ける必要がある。

## 8. おわりに

(1) 団地に於ける母性保健の状態を測るバロメーターとして、妊娠、分娩、産褥疾患の罹患率を挙げたい。藤沢団地に於て、これは59%、府中、柳沢、西原、前原団地の総合調査では58%であつた。対象とした愛育病院の自宅群では51%であつた(昭和39年)、また昭和40年、愛育病院、入院病歴の全体では41%であつた。

(2) 藤沢団地に於ける妊産婦疾患の発生頻度は、総合的に階層差は認められなかつたが、流産傾向、早産傾向中毒症等、の個別症状では階層の高まるに従つて、その発生頻度は多くなつている。この原因については二、三の面から検討を加えた。

(3) 母親学級、受胎調節、人工妊娠中絶、分娩無痛法分娩施設等は妊産婦の選択心理の働く対象であるが、藤沢団地に於ては、これらについては階層差のない一定の動向が認められた。

(4) 「質問、希望」欄についての反応は統計を理解する上で重要な意味をもつた。

(5) 藤沢団地の特徴を、建築構造の規格によつて支配される一般的な面と現代文化に影響される地域的な面とに分けて統計的に観察したが、そこには明らかに二大特徴が認められた。

(6) 藤沢団地を以て団地全体の標本と見做すことは危険で、団地全体の状況を把握するためには、もつと多くの団地について標本調査をする必要がある。

## 〔文 献〕

- (1) 森山豊、妊娠中毒症、母子保健叢書、母性編7、6頁(昭和35年)

- (2) 岩田正道、小林一夫：「流早死産」母子保健叢書 科編) 431頁(昭和37年)  
 10、妊産婦死亡と流早死産、27頁(昭和35年)  
 (3) 足立善雄：「流早産、習慣流早産」産婦人科治療 科編) 492頁(昭和37年)  
 大系(産科編) 239頁(昭和39年)  
 (4) (2)の30頁  
 (5) (2)の4頁  
 (6) 森山豊：「晩期妊娠中毒症」産婦人科治療大系(産 科編) 484頁(昭和37年)  
 (7) 小畑英介：「鉗子手術」産婦人科治療大系(産 科編) 492頁(昭和37年)  
 (8) 小坂清右：「帝王切開術」産婦人科治療大系(産 科編) 484頁(昭和37年)  
 (9) 松尾正雄：「母子衛生対策総論」母子保健叢書、 母性編 14頁(昭和35年)

### Ⅲ 団地における乳幼児食生活の実態

#### (団地内における乳児及び2、3、4才児全数調査)

#### 1. 調査目的

第1回調査(昭和39年11月中旬～40年2月)に東京都及びその周辺にある団地10カ所に於て、巡回育児相談に來所した乳幼児125例<sup>(1)</sup>について食生活調査を行なった。

しかし第1回の調査では積極的に育児相談に集つたもののみについて行なつたので、その調査結果が果して団地の真の実態をあらわしているかどうか疑問がある。育児相談に來所しない乳幼児の食生活をこそ明かにすべきではなからうかと考えて、今回は対象を1カ所の団地にしぼり、0才～4才(1才児は除く)の全乳幼児を対象にその食生活に関する調査を行なった。

#### 2. 対象団地及び調査方法

##### (1) 対象団地

対象の団地は神奈川県F市郊外の丘の上に昭和36年～38年に建つた巨大な団地で全部で43号棟(この中分譲住宅7棟は除いて調査した。)1,140戸が居住している。

団地内には数軒のマーケットがあつて、食糧や日用品には不自由しないし、野菜や果物を積んだ産地直送の車も来て食糧を供給している。駅の繁華街までは徒歩で12分前後、買物にも便利である。

##### (2) 調査方法

次の3つの方法を用いて乳幼児の食生活及びそれに関係あると思われる家庭環境や、乳幼児の栄養状態の把握につとめた。

##### ① 家庭調査 昭和41年2月

団地の性格、即ち対象乳幼児の生活の背景を知る必要から簡単な家庭調査表を全戸に配布した。一般に団地居住者はプライバシーを犯されることを極度に嫌う傾向をもつということであるが、約80%の回収を得た。

(回答数908～949…質問の項目によつて回答数が多少異なる)

##### ② 乳幼児の食生活調査…昭和41年2月～3月

団地内の乳幼児のいる家庭全戸を経験ある栄養研究員が戸別訪問して母親に面接し、乳幼児期の食事歴、現在の摂食状況等について、ききとり調査を行なつた。調査表は授乳期離乳期、幼児期の三型に分かれ、それぞれに該当した児数は下記の通りである。

授乳期栄養調査表 0～6カ月 89例 (♂ 39 / ♀ 51)

離乳期栄養調査表 6～12カ月 116例 (♂ 64 / ♀ 52)

幼児期栄養調査表 2、3、4才児349例 (♂ 193 / ♀ 156)

##### ③ 幼児の身体測定及び臨床検査(特に栄養状況に重点をおいた)…昭和41年4月

前記の戸別訪問による乳幼児の食生活調査完了後、幼児のみについて小児科医による体重、身長測定及び栄養に重点をおいた臨床検査を実施した。これは検査の時期が短時日に限られていたので、これに参加した幼児は食生活調査の対象になつた全幼児349例中137例にすぎなかつた。

#### 3. 調査成績

##### (1) 対象団地の性格(対象団地幼児の生活の背景)

世帯主の年齢分布は第1表のようで、その母は30～39才の間に分布し、壮年層が団地構成の主軸をなしていることがわかる。

家族構成をみると、独身の1.9%を合わせて子供なしの家庭が $\frac{1}{4}$ 、子供のある家庭が752戸で80%を占めている。この中子供1人の家庭が約 $\frac{1}{3}$ 、子供2人の家庭が $\frac{1}{3}$ を占め3人以上の家庭は26戸2.8%にすぎない。また世帯主が父母、あるいはその何れかとの同居の例は極めて少く3.5%で、大部分は夫婦と子供だけのいわゆる核家族であつた。

世帯主の職業は第1表のようで、いわゆるサラリーマンが圧倒的に多い。

第1表 対象団地を構成する家庭の性格

世帯主の年齢構成			家族構成			世帯主の職業		
年齢区分	実数	%	世帯数	実数	%	職業	実数	%
20～29才	120	13.2	世帯主独身	18	1.9	会社員	803	84.7
30～39才	688	75.3	子供なし	162	17.4	管理職	10	1.1
40～49才	76	8.4	子供有	752	80.7	専門技術	62	6.5
50～59才	17	1.9	〃 1人	466	50.0	その他	17	1.7
60～69才	9	1.0	〃 2～3人	281	30.2	無	7	0.7
年齢不明	2	0.2	〃 4～5人	5	0.5	記入なし	50	5.3
計(回答数)	912	100.0	計	932	100.0	計	949	100.0
回答なし	228	20.1	回答なし	208	18.3	回答なし	191	16.8
合計	1,140		合計	1,140		合計	1,140	

(2) 授乳期乳児の栄養法

① 月令別栄養法

生後0～6カ月の授乳期乳児の月令別栄養法は第2表のようである。対象例数が少く、かつ横断資料であるため母乳・混合・人工栄養間に月令的な一定の変移傾向は

第2表 月令別栄養法分布

月令	母乳	混合	人工	計
0カ月	3	4	2	9
1	0	3	3	6
2	2	7	10	19
3	3	4	8	15
4	3	7	9	19
5	4	3	5	12
6	3	1	5	9
計	18	29	42	89

みとめられなかつたが、0カ月9例中既に混合または人工栄養になつているものが6例に及び、2カ月後には常に人工栄養が最大数を占めていることは残念である。

巷野氏による札幌市における調査成績にくらべると母乳栄養児の比率は著しく高い。

② 乳のみ方

乳のみ方を栄養法別にみると(第3表)母乳栄養の場合は全く問題がなかつたが、「いつもよくのむ。」が混合、人工栄養に少く、「嫌がることが多い。」がこの両栄養児に多い。殊に混合栄養にこの傾向が強いことは注目し値する。但し混合栄養の乳をいやがる5例の中、3例は母乳を好むが、ミルクを飲まないということであつた。

③ 母乳栄養に対する意識調査

生後1～4カ月児に母乳栄養が極めて少い。(1カ月0%、2カ月10%、3カ月20%、4カ月15%)これ以上に母乳栄養の減少するのは好ましくないで、その対策を見出す為に次の質問を行なつた。

第3表 乳のみ方(栄養法別・月令別分布)

月令	総対象者数	母乳			混合			人工		
		いつもよくのむ	普通(時々いやがる事もある)	いやがる事が多い	いつもよくのむ	普通(時々いやがる事もある)	いやがる事が多い	いつもよくのむ	普通(時々いやがる事もある)	いやがる事が多い
(カ月)										
0	9	3			2	2		2		
1	6				1	2		1		2
2	19	2			4	3		6	2	2
3	15	3			2		2	5	1	2
4	19	3			3	2	2	4	5	
5	12	2	2		1	1	1	3	2	
6	9	3			1			4	1	
計	89	16	2		14	10	5	25	11	6



a 「あなたが母乳栄養をすることに御主人は賛成ですか。」

b 「母乳栄養に不安、或は不都合をお感じになりませんか。」

c 「母乳栄養をしておられる理由。」

aの質問に関しては全部の父親が賛成しているということである。

bの不安感に対する質問では、7名（40%）の母親が子供の発育（4例）と、母親の健康（3例）に不安をもつていると答えを与えた。

例数が少ないので断定は出来ないが、母乳栄養に不安感を抱く母親が比較的多いことが伺われ、これに対する適切な指導の必要性を感じる。

cに対しては母乳栄養をするのが当然であるからという答えが多かった。

「現在与えている母乳は何カ月まで続けたいと思うか」という質問に対しては、出来るだけ7～8カ月迄与えたいという者が4例、10～12カ月まで与えたいというものが8例で比較的長期間に母乳を与えたいとするものが多かった。

尚6カ月以下のものは3例で、考えていないというものが3例あった。

#### ④ 混合又は人工栄養について

混合又は人工栄養の母親71名に対して次の3つの質問を行なった。

a ミルクを与えるようになった動機

b 調製粉乳の用い方

c 哺乳ビンの洗浄法

aのミルクを与えるようになった動機としては、母乳不足と答えたもの88.8%でその大半を占めていた。

長崎大学の白井氏等の報告では、714例中78%のものが1カ月以内に人工乳を加えた栄養法をとり、原因別にみると、これも母乳不足と考えられるものが最も多かったということである。この様に母乳不足が人工、混合の最大原因となつている現在、母乳分泌促進にどの程度努力が払われたかについて一歩進めた調査が必要であるように思う。

bに関しては、殆どどの母親は調製粉乳を使つているが、缶の指示通りにうすめているもの70%で、指示よりうすいもの20%、濃いもの4%程度であつた。巷野氏らの報告では±1%濃度範囲内を入れると45.2%～56.8%であつた。

また、うすくした理由は、飲まないからというもの4例、医師の指示によるもの6例、指示量以上にはしがるからというもの2例になつていた。濃くしたものの3例中

2例は医師の指示で、1例は指示量だけのまないからといつていた。

調乳量は56%のものが缶の指示通りで、その中82%のものが指示通りの量で丁度よかつたと答えていた。それ故、実際の缶の指示が適当であつたものは、全体の46%に当つている。又指示量より多く作つていたもの21.5%少く作つていたもの22.5%で前者は「ほしがるから」後者は「のみ残すから」というものが大部分であつた。

巷野氏等<sup>(5)</sup>は調乳量が基準量に合うものは15.2%であると報告しているので、この調査結果はそれより大巾に上廻つているわけである。

cの哺乳びんの洗い方としては、よく洗つて煮沸消毒をしているもの45%で、洗剤だけのもの、洗剤で洗つて熱湯を通すもの各々21%であつた。12.7%（9例）が市販の消毒剤を使用していた。

#### ⑤ 果汁

83.5%のものが果汁を与えており、この中医師、栄養士、保健婦らに勧められて与えるようになったもの34例（52%）を占め、育児書によるものは11例（16%）であつた。

与えていない場合の理由としては、「必要がないと思う」「いやがる」とかが多かつた。

0～2カ月の乳児の場合では、月令が早いからというものが6例あつた。

与えはじめの月令は2カ月からが最も多く、43.6%、1カ月からが29.6%で各以上が1～2カ月から与え始めていた。果汁の材料としては殆どが生果物で、ベビーフード缶の使用は3例程度であつた。用いた果物の種類は季節の関係（2～3月）もあつて柑橘類が37.7%、りんごが40%でその殆どを占めていた。果汁は77.2%のものが1日1回与え、あまり喜ばないものが18.5%程度みられた。

#### ⑥ ビタミン剤

ビタミン剤を与えていないものは70%でこれを栄養法別にすれば、母乳87%、混合72%、人工59%の順になつていた。

人工栄養では、調製粉乳を使用するものが殆どであつた。この場合乳を普通に飲めばビタミン類の不足の心配はないと考えられているが、ビタミン剤を別に与えている17例についてその理由をみると、医師の指示、必要だと思ふからといふのが多く、各々8例ずつあつた。

#### ⑦ 離乳について

現在、離乳食を与えているものを月令別にみると、第4表のようになる。3カ月では15例中1例が離乳を始めしており、4カ月では19例中8例が、5カ月で全部のもの

第4表 離乳食を与えているもの

月令	3 (カ月)		4		5		6	
	実	%	実	%	実	%	実	%
与えているもの	1	6.7	8	41.0	12	100.0	11	100.0
対象者数	15		19		12		11	

第5表 月令別対象児数

月令	6 (カ月)	7	8	9	10	11	12	1才 1才2 カ月	計
対象児	15	18	13	17	9	15	18	12	116 (♂64 ♀52)

が離乳食を与えていた。

③ 離乳期乳児の栄養法

離乳期栄養調査の対象としては生後6カ月～1年2カ月までとした。対象の年齢別分布は第5表の通りである。

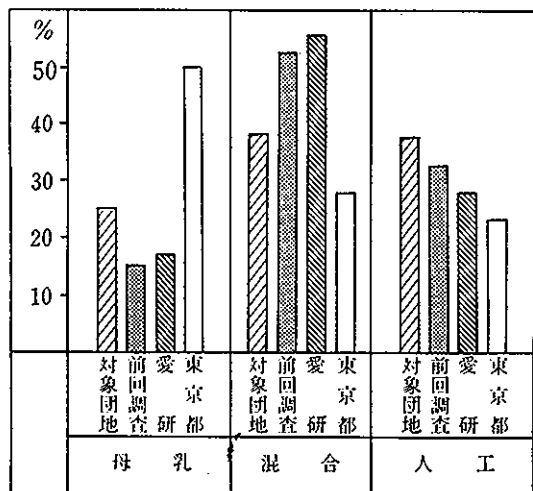
① 授乳期における栄養法

対象児の授乳期における栄養法は第1図に示す様に1960年の東京都の成績に比較すると母乳栄養はそのまにすぎないが、前回調査した団地の成績及び愛研保健指導部に比較するとやや多い。一方人工栄養は四者の中で最高率を示した。

② 離乳開始の時期とその後の離乳のすすめ方

離乳開始の時期は4カ月が最高、次が5カ月、約70%が4～5カ月の間に離乳を開始している。6カ月、7カ月に離乳を開始している者も約18%にみられ、これは前回調査の成績よりも高率である。

第1図 授乳期の栄養法



昭和37年当研究所で全国保健所に離乳開始の指導基準についてアンケートを求めた結果<sup>(8)</sup>では、5カ月以後、体重7kg以上に達してからという回答が半数以上を占めていたが、これにくらべると本対象は離乳開始が早めである。又前回調査の団地対象と比較すると、4カ月までに離乳を開始しているものはどちらも約52%ではぼ等しいが、6～7カ月の幾分おそめに開始しているものは本団地対象に比較的多い。(第6表)

第6表 離乳開始月令

月令	本対象地 (116名)	前回調査 (142名)	愛研 (83名)
	(%)	(%)	(%)
2	0	1.4	0
3	12.1	14.8	12.1
4	40.5	38.0	65.0
5	29.3	37.3	18.1
6	14.6	7.8	3.6
7	3.5	0.7	1.2
計	100.0	100.0	100.0

その後の離乳の進ませ方を一日に与える離乳食の回数の面からみると、第2図の様に、5カ月では5人に4人までが1回食であるが、1回食は6カ月、7カ月と急速に減少して8カ月以降は全然みられない。2回食は6、

7カ月に最高、8カ月以後は3回食児が最も多くなり、前回調査対象にくらべると離乳の開始は幾分おそめであるが、その後の進行は、離乳食事の回数からみるとむしろ急速であつた。

③ 離乳をするのに参考になっているもの

離乳をする上に参考になっているものとしては、半数以上(53.1%)のものが一応育児書をあげており、これが最高位を占めている。経験(42.9%) 開業医(27.0%)の利用も比較的多く、これは地理的環境を物語るものであろう。その他、保健所、友人先輩、病院、薬局、家族の順で利用されていた。

④ 離乳に用いられた食品

熱エネルギーとしての穀類及び穀類製品、蛋白質源としての卵、乳、魚、肉及びこれらの製品、野菜、果実類等、何れも離乳食としてかなり広範囲に用いられており、このことから大体において、食生活水準も低くなく、これらの食品の入手も、さして困難ではないこと、又母親の離乳に関する関心も浅くないこと等が伺える。

(4) 幼児の食生活

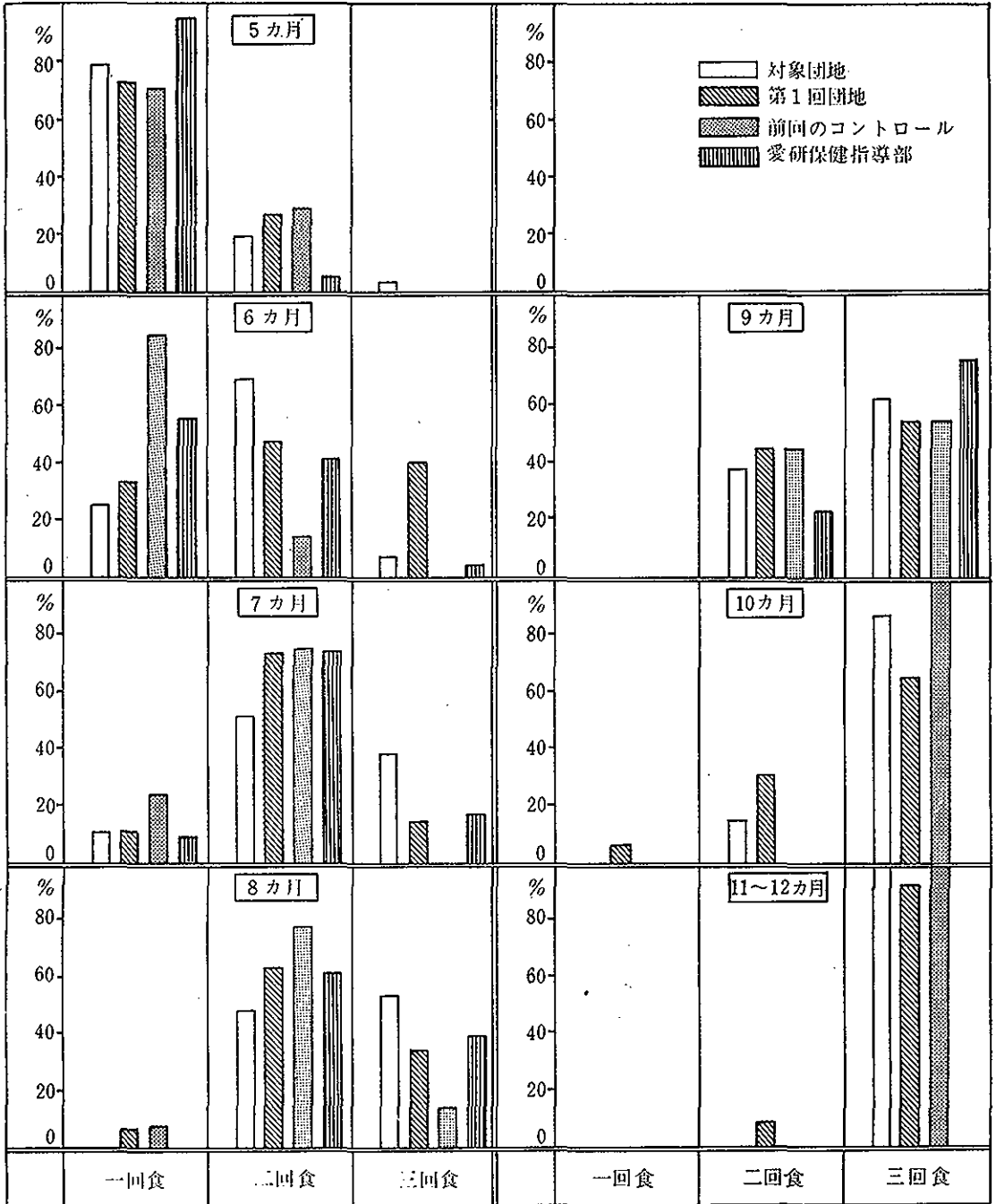
幼児の食生活に関する調査は、2才、3才、4才児を対象として行なわれた。

① 食事の栄養的検討

調査前日に幼児が摂取した食事献立を出来るだけ詳細に聴取し、これについて、前回調査と同様、次の様な検討を加えた。

即ち食品を①穀類、芋類等の澱粉性食品、②乳、卵、

第2図 月令別離乳食回数



肉、豆等の蛋白性食品、③野菜、果実類の無機質やビタミンに富んだ食品、④油脂等の脂肪性食品の4群に分け  
 A ①②③④の4群の組合せ…一応質的にととのつた食事

B 上のいずれか3つの組合せ…質的に軽度に欠陥のある食事  
 ①②③、②③④、①③④、①②④の4種があり得る  
 C 上の中何れか2つの組合せ…質的に欠陥のある食事

事。

①②、①③、①④、②③、②④、③④の6種の組合せがあり得る。

D 何れか1つ…食事としての形態をなさない。

1回の食事にいくつの群が揃っているかによつて栄養的にA、B、C、Dの四段階に分けた。これによつてみると4群とも揃つた食事は、朝食では特に達せず、昼食でも強、夕食でようやく約3%に増加する。これ以外は全部質的にさえも満足でない食事に属するが、殊に朝食では僅かに2群だけの組合せが20%を占めている。又蛋白性食品のついていない食事は比較的に昼食に多く、10人に1人の割合でみられる。一方野菜や果物が全く用いられていない食事は朝食に多く約3%はこれに属する。これらの傾向は前回調査の団地対象や保健指導部と近似している。

② 食事の時刻

朝食は大部分が7.30~9.00AMの間にとられているが約12人に1人は7時前の朝食、又10時前後に朝食をとつたものが6人に1人の割合でみられた。夕食は6時乃至7時半のものが大部分を占めていたが、8時或は8時以後になつたものが約10%にみられた。

③ 一緒に食事をした人

食事を子供1人でとつた例は、朝食に比較的少かつたが、それでも10%程度であり、あとは誰かと一緒に食べ

ている。両親や兄弟と即ち家族揃つて食事をしたものは朝食で約30%、夕食で40%にみられた。このあとは母親だけと食事をしているものが大部分で、これは幼児の生活形態から考えて当然のことであろう。

④ 間食の種類

間食として与えたものでは、果物、牛乳、せんべい、ビスケット等が主位を占めているが、あめ、チョコレート等の頻度も必ずしも少くない。勿論これらは1回に与える量、一緒に組合せた食物如何等によつて、その間食上の意味、役割が変化してくるので、それらについても更に検討の必要がある。

⑤ 食事のとり方

食欲…ふだんの食欲に関する評価は、母親の主観によるところが大きい。「よくたべる」「まあまあというところ」を合せると各年令層とも50~60%がこれに属し、残りの約40%は「あまりたべない」「非常に少食」「たべ方がむら」等、幼児特有の食欲不振を訴えている。これらの傾向は大体において前回調査成績と同じであつた。

⑥ 幼児の体格、栄養状態

食事調査をした幼児349名に対し調査終了後、健康診断を実施した。健診は、母親の自由意志で参加した137名(♂73, ♀64)について行なつた。(第7表)

身長及び体重の平均値は厚生省値に比較し約半年の開

第7表 団地幼児の体格 (昭和41年4月)

	2 才						3 才						4 才						総計		
	男		女		計		男		女		計		男		女		計				
身長 ±3%	大	17	60.7	24	66.7	41	64.1	19	54.3	11	61.1	30	56.6	5	50.0	4	40.0	9	45.0	80	58.8
	中	10	35.7	12	33.3	22	34.3	14	40.0	7	38.9	21	39.6	5	50.0	5	50.0	10	50.0	53	39.1
	小	1	3.6	0		1	1.6	2	5.7	0		2	3.8	0		1	10.0	1	5.0	4	22.1
	計	28	100.0	36	100.0	64	100.0	35	100.0	18	100.0	53	100.0	10	100.0	10	100.0	20	100.0	137	100.0
体重 ±10%	大	15	53.6	21	53.3	36	55.3	19	55.9	8	46.7	27	52.0	4	44.4	2	22.2	6	36.7	69	51.5
	中	13	46.4	13	36.1	26	40.6	15	44.1	10	53.3	25	48.0	5	55.6	7	77.8	12	63.3	63	47.0
	小	0		2	5.6	2	3.1	0		0		0		0		0		0		2	1.5
	計	28	100.0	36	100.0	64	100.0	34	100.0	18	100.0	52	100.0	9	100.0	9	100.0	18	100.0	134	100.0

きをもつてそれを凌駕していた。(体重測定不能3名)

4. 総括及び結論

昭和41年2月~4月にかけて、神奈川県F市の巨大団地の乳児及び2、3、4才児を対象に、食生活及び栄養に関する全数調査を行なつた。0~6カ月の授乳期乳児

89名、6~12カ月の離乳期乳児116名、2~4才幼児349名、それぞれの年令層に調査表を用意し、栄養研究員が面接して、ききとり調査した。又最後に幼児の一部について(137名)身体測定、健康診断を実施した。

結論

1 人工栄養が高率であり、母乳栄養が少い。母乳栄養

- をしている母親に、母乳栄養に対する不安感をもつ者が多い。
- 2 混合及び人工栄養に、乳をいやがる例が多く、殊に前者にそれが多かつた。
  - 3 離乳開始が5カ月前のものが22%、6~7カ月になっているものが18%みられた。又離乳の進行が早く、7カ月には既に90%の乳児が2~3回の離乳食を与えられていた。
  - 4 離乳上参考しているものとしては、育児書、経験開業医の順で多かつた。
  - 5 離乳食としては、かなり広範囲に各種の食品がとり入れられていた。
  - 6 幼児のとつた朝食及び昼食の約々及び夕食の約々はその食品組合せが栄養的に均衡を欠き、殊に朝食にその傾向が強くみられた。
  - 7 幼児が家族全員と揃つて食事をするのは、朝食約30%、夕食に約40、1人で食事をするのは朝に多く10

%程度であつた。

- 8 間食の主体は果物、牛乳、せんべい、ビスケット等で占められていたが、あめ、チョコレート類も必ずしも少くなかつた。
- 9 食欲があまりふるわない幼児が約40%にみられた。
- 10 幼児の体格は厚生省値を約半年分、上まわつていた。

〔文 献〕

- (1) 日本総合愛育研究所紀要 第一集
- (2) 巷野悟郎 小児保健研究 23 5 201 1966
- (3) 白井清夫 小児保健研究 20 2 91 1961
- (4) 巷野悟郎 小児保健研究 23 5 201 1966
- (5) " " " " " " " "
- (6) " " " " " " " "
- (7) 日本総合愛育研究所紀要 第一集
- (8) 武藤静子 小児保健研究 23 2 93 1965

Ⅳ 団地生活としつけの意識調査

1. 目 的

この研究の目的は、子どもの生活やしつけの側面から、団地生活の実態および問題点を把握しようとするものである。

2. 方 法

今回は、団地に居住するものとしつけ上の問題や子どもの生活の実態を知ること主眼をおくこととした。したがつて、一般家庭との比較としてではなく、一つの団地に限り、その団地全戸にわたつて調査をおこなつた。

調査は質問紙法であり、一応各世帯に配つて回収する方法をとつた。

本調査は、子どもひとりひとりについて記入してもらうこととし、二人以上子どものいる家庭には、その子ども数だけ調査用紙をくばつた。

対象は神奈川県藤沢団地全世帯であり、質問紙の配布回収は、団地内の婦人サークル(卵月会)と自治会の好意的積極的な協力をえて、複雑で困難である調査用紙の配布回収にもかかわらず、予想をはるかにうまわる好成績の回収を得た。

対象(有効回答のもの)を年令別、男女別にしめすと第1表のようになる。

第1表 対 象

年 令	性 別		計
	男	女	
0カ月~5カ月	32	29	61
6カ月~11カ月	39	35	74
1 歳	100	85	185
2 歳	102	101	203
3 歳	86	51	137
4 歳	68	60	128
5 歳	42	32	74
6 歳	33	25	58
7歳~9歳	44	45	89
10歳~12歳	17	17	34
13歳~15歳	3	4	7
16歳~18歳	0	2	2
合 計	566	486	1,052

3. 調 査 内 容

まず、対象の藤沢団地の前記婦人サークルのメンバー数名と、団地での育児に関する問題点を中心とした話しあひの会合をもつた。この会合での活発な発言のなかから、団地に居住して子どもを育てているという実際の経験を土台とした、貴重なさまざまな問題がうきぼりにされた。われわれは、ここで話しあわれた問題点を参考として質問紙を作成した。

質問内容は、A、B、C、の大きな三つの問題にしぼ

B 子どもの生活調査

団地	号棟	号	1DK、2K、2DK、3K、3DK、3LK、 テラスハウス
お子さんの名前		男 女	記入年月日 年 月 日 生年月日 年 月 日

記入の仕方

- この調査はお子さんひとりひとりについてです。たとえば外あそびについても5才児と1才児では大変ちがいます。お二人以上お子さんのいらつしやる場所では、御面倒でもお子さんひとりについて一部ずつ記入して下さい。
- 該当するものに○印して下さい。一つの質問にいくつ○印がついてもよろしいです。該当するものがないときは、その他の欄に自由に記入して下さい。

- A 1. 戸外あそびを十分させていますか。      はい      いいえ  
(いいえの方) それはどうしてですか。  
a つきそつていくのが大変だから    b 子どもがけんかをするから    c 遊具をはこぶのが大変だから  
d 親同志のつきあいになるのがわずらわしいから    e その他(      )
2. 戸外あそびに、つきそつていきますか。      はい      いいえ  
(つきそつていく方) その理由を○印してください。  
a 友だちをいじめる    b 友だちにいじめられる    c 母とはなれない    d 遊具をはこぶため  
e 悪いことをおぼえるから    f 車が通るため    g その他(      )
3. 戸外あそびを1日どのくらいさせていますか。  
1日大体 \_\_\_\_\_ 時 \_\_\_\_\_ 分 ぐらい。      1日大体(      ) 回
- B 1. 団地のため、このお子さんのしつけ上よいと思うことがありますか。      ある      ない  
(よいと思われる方) つぎのどんな点でしょうか。  
a 設備がよい    b 室内の温度調節がうまくいく    c 広い    d あそび場がある  
e 自然環境にめぐまれている    f 生活水準のおなじ子どもたちがいる    g 他人にわずらわされ  
ないでしつけができる    h おなじ年齢の子が多ぜいいる    i 危なくない    j 騒音が  
室内に入らない    k 同年令の子と比較ができる    l 幼児教室がある    m 育児相談などが  
たびたびある    n 集会所利用のおけいごとができる    o その他(      )
2. 団地のためお子さんのしつけ上困ると思うことがありますか。      ある      ない  
(困ると思う方) どんな点でしょうか。  
a 幼稚園が近くにないため    b 保育所が近くにないため    c 戸外のあそび場がない  
d 室内がせまい    e 危険なことが多い(      ) など    f 近所の目がわずらわしい  
g 近所にひびくので大きい音をたてないように叱ることが多くなる    h 同年の子と比較してあ  
せるようになる    i 友だちの家にすぐ入りこむ    j 友だちの家といきぎがはげしい  
k その他(      )
3. 子どもの性格は環境ばかりに左右されるわけではありませんが、団地で生活すると子どもにどんな影  
響を与えたいと思いますか。  
a もし、団地でなくてもいまの子どもの性格と変りないと思う。  
b 団地のため幾分つぎのような傾向があると思う。  

独立心が育つ	依存的になる
社会性が育つ	非社会的になる
競争心がつよい	協力性にとむ
閉鎖的になる	開放的になる
体力がのびる	体力がおとる

運動能力がすぐれる	運動能力がおとる
積極的になる	消極的になる
その他 (	)

C 1. 団地内のサークルやクラブ活動に入っていますか。

参加している                      参加していない  
(参加していない方) その理由

a 子どもがいるから    b 勤めていて時間がない    c 忙しいから    d わずらわしいから  
e 興味のあるものがない    f その他 (                      )

2. 団地内での集りや催しものに出席しますか。

積極的にできるようにしている                      あまり出席しない                      一度も出席したことがない

つた。すなわち、A項では、子どもの戸外あそびを中心としたことを質問項目とし、B項では、団地生活がしつけにおよぼす影響についてのさまざまな問題をさぐることにした。また、C項では、母親の団地内でのサークル活動についてたずね、団地内で積極的になかまづくりをしているかどうかをしらべることとした。質問内容の詳細は、別紙の質問紙「子どもの生活調査」に示す通りである。なお、「子どもの生活調査」として記入してもらうことにしたのは、母親が抵抗なく記入しはじめるよう便宜的に名づけた表題にすぎない。

記入には、号棟と室号と子どもの名前、生年月日を記入して、母親のことについての記入はさせた。しかし別個に家族員の調査をおこなっており、必要があれば照合できるようにしてある。

調査時期は、1965年10月に予備調査として話しあいの会合をもち、1965年11月に調査用紙を作成し、1966年2月はじめに用紙を配布(記入要旨の説明をしながら)、2週間後に回収をおこなった。

#### 4. 結 果

回収された質問紙1,650のうち、該当なしは598であるが、これは子どものいない世帯が主である。しかし、調査用紙に子どもの対象年齢を規定しなかつたため、中学生や高校生また乳児をもつ母親が該当なしと答えているものが含まれている。とくに、13才以上の大きい子にそれが多い。したがって、ここでは、乳児から小学生、つまり12才児までの子どもを対象として結果を考察した。

年齢段階を、誕生前、1~2才児、3~4才児、5~6才(幼稚園時代)、7~9才(小学校低学年)、10~12才(小学校高学年)の6段階において、各質問項目について検討した。

##### A. 子どもの戸外あそび

団地の子どもたちの生活を、本調査では、戸外あそびに限って調べることにした。もちろん、屋内での子どもの生活にも団地としての問題はあがあるが、B項と重複するものもあり、質問項目をできるだけ少なくする意味もあつて、今回は戸外あそびをとりあげた。

戸外あそびのばあい、団地では一般家庭とちがつて、囲いのなかの庭というわけにはいかない。こうしたことが、子どもの戸外あそびにどのように影響しているかをしらべた。

(1) 戸外あそびを十分させているかを質問した。これはおなじ1時間でも、ある母親にとっては十分であり、ある母親にとっては実はもつと戸外あそびをさせたいという時間になるわけで、母親の満足度にかかわっている。

第2表は、戸外あそびを十分させているものといないものについて示したものである。

ここでもみるように、1~2才では約半分のもが戸外あそびを十分させており、3~4才では67.5%で、十分させていないものとの割合は2:1になつている。5才以上の幼児になると、5~6才80.3%で、多くのものは、戸外あそびを十分にしている。小学校低学年では84.3%でさらに戸外あそびを十分しているものが多くなるが、

第2表 戸外あそびを十分させていますか

年 令	1才未満		1～2才		3～4才		5～6才		7～9才		10～12才	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
はい	25	18.5	195	50.3	179	67.5	106	80.3	75	84.3	20	58.8
いいえ	85	63.0	190	49.0	85	32.1	26	19.7	10	11.2	7	20.6
無回答	25	18.5	3	0.7	1	0.4	0	0.0	4	4.5	7	20.6
計	135	100.0	388	100.0	265	100.0	132	100.0	89	100.0	34	100.0

小学校高学年になると、58.8%と低くなつてきている。小学校高学年の子どもは、学校生活の時間が延長することや勉強の時間にとられるためと考えられる。しかし、3～4才の3分の1の子どもたち、5～6才の20%の子どもたちは、戸外あそびを十分させられないでいる。つぎに、戸外あそびを十分させられないというもの

の、その理由をしらべてみる。質問紙では該当する項目があれば、いくつでも印するようになっていた。また、該当するものがないときは「その他」の項に理由を記述する。この結果はつぎの第3表であるが、表のパーセントは、戸外あそびを十分させているかの質問に、「いいえ」と回答した人数を100としての割合である。

第3表 戸外あそびを十分させられない理由

年 令	1才未満		1～2才		3～4才		5～6才		7～9才		10～12才	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
a	つきそつていくのが大変だから。忙しいから。		4	4.7	126	65.2	45	53.0	6	23.1	—	—
b	子どもがけんかするから。わるい遊びをするから。		—	—	4	2.2	3	4.5	2	7.7	—	—
c	遊具をはこぶのが大変だから。		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
d	親同志のつきあいになるのがわずらわしいから。		—	—	6	3.2	5	5.9	2	7.7	1	10.0
e	子どもが小さいから。		73	86.0	37	19.4	2	2.4	1	3.8	—	—
f	子どもが外へ出たがらないから。友だちがいないから。		—	—	—	—	22	25.9	7	26.9	6	60.0
g	4階、5階のため。		1	1.2	7	3.7	6	7.1	—	—	—	—
h	体が弱いから。		3	3.6	11	5.8	5	5.9	2	7.6	—	—
i	寒いから。		12	14.0	22	11.6	11	12.9	1	3.8	—	—
j	その他。		—	—	4	2.2	2	2.4	8	30.8	4	40.0

戸外あそびでは、零才台は当然のことながら「小さいため」対象にはならない。せいぜい日光浴程度であり、また誕生に近いわずかのものが戸外あそびをしているにすぎない。小さい子ども（1～2才、3～4才）では、「つきそつていくのが大変である。つきそつていくことができない」の理由がもつとも多く、1～2才65%、3～4才53%で、半数以上を占めている。1～2才では、「つきそつていくのが大変だから」のつぎには「小さいから」外あそびをさせないものが20%近くあり、「寒いため」に外あそびをさせないものが22名で12パーセントを占めている。3才以上になると、子どもの意志で外へ出たがらないということがあり、これは年令が大きくな

るにしたがい、外あそびしない理由の大部分を占めるようになる。その他に年令の大きい子が外あそびしない理由は、「幼稚園、小学校で十分あそんでくるから」となり、小学校の高学年では全員「学校の帰り時間がおそくてあそばない」となっている。

団地である特殊性として、三輪車などの持ちはこびが大変なため、とくに4階、5階では外あそびの機会が少なくなるのではないかと、C項でその点をたしかめたが、一名も該当者がなかつた。これは藤沢団地では遊具おきばに不備な点がないということで、他団地では結果がことなつてくるとと思われる。しかし、「4階・5階のため、戸外あそびを十分させられない」という答が10%みられ



る。これは、とくに選択肢として理由にあげておかなかつたのに、「その他」に記述された数である。したがって、4階・5階のためという理由は「つきそっていくのが大変」という答に相当ふくまれていると考えられる。また、「寒いから外あそびをしない」は、「その他」に記述されたものであるが、これは調査の時期が2月であ

つたことによる。

(2) 戸外あそびにつきそつていつているかをしらべた。その結果は第4表にみるように、3~4才で半分以上のもの(60%)がつきそつていなくなつている。わずかの母親であるが、5才以上でもあそびにつきそつていつている。

第4表 戸外あそびにつきそつていきますか。

	1才未満		1~2才		3~4才		5~6才		7~9才		10~12才	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
はい	37	27.4	329	84.8	104	39.3	10	7.6	0	0.0	0	0.0
いいえ	2	1.5	35	9.0	153	57.7	117	88.6	81	91.0	23	67.6
無回答	96	71.1	24	6.2	8	3.0	5	3.8	8	9.0	11	32.4
計	135	100.0	388	100.0	265	100.0	132	100.0	89	100.0	34	100.0

母親が戸外あそびにつきそつていく理由は、「その他」の項に多く記入されたので、「小さいため」の項をつくり、「ひとりであそびに出ない」ものをc「母とはなれない」といつしよにし、また、「あそぶところが危険である」をf「車が通る」といつしよに集計した。さらに「子どものあそびを知りたい」「母自身の健康のため戸外につきそつていく」など、母の必要からつきそつていくものをh項とした。この結果はつぎの第5表にしめすとおりである。

第5表 戸外遊びにつきそつていく理由

	1才未満		1~2才		3~4才		5~6才	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
a 友だちをいじめ	—	—	11	3.4	9	8.7	—	—
b 友だちにいじめられる	—	—	14	4.3	11	10.6	—	—
c 母とはなれない。ひとりで遊びに出ない	2	5.4	49	14.9	31	29.8	6	60.0
d 遊具をはこぶため	1	2.7	12	3.7	9	8.7	—	—
e 悪いことをおぼえるから	1	2.7	4	1.2	4	3.8	—	—
f 車が通る。遊び場が危険	—	—	112	34.0	40	38.4	—	—
g 小さいから	22	59.5	188	57.2	18	17.3	1	10.0
h 子どもの遊びを知りたい。母の健康のため	1	2.7	10	3.0	7	6.7	—	—
無回答	10	27.0	19	5.8	6	5.8	3	30.0
戸外遊びにつきそつていく人数	37	—	329	—	104	—	10	—

1~2才までは、自分の家がわからない、ひとりでは行けない、など、子どもが小さいため、つきそつていかざるをえない。戸外が危険なためつきそつていくというのは、団地内に車が通ること、あそび場が大きい子といつしよであること、コンクリートであること、あそび場がせまいことを危険としているものが多かつた。これは、1~2才35%、3~4才42%と大きな割合をしめしている。3~4才で小さいからとの理由でつきそつていくものには、子どもが遠くへいつてしまうなども含まれている。この年齢では、能力としてはひとりで戸外あそびができるのに、母親からはなれない、ひとりでは出ないなど子どもの性格的な問題から母がつきそつているものが多い。とくに5~6才で戸外あそびにつきそつていく理由は、ほとんど子どもが母とはなれて戸外あそびをしないためといつてよい。

(3) 戸外あそびをどのくらいしているか、1日の戸外あそびの時間と回数を記入してもらつた。これを集計すると、第6表、第7表となる。

まず、第6表によつて一日の戸外あそびの時間をみると、乳児は30分から1時間が多く、1~2才では1時間から2時間のものが多い。3才以上の幼児および小学校低学年の子どもは2時間から3時間に集中している。20%前後の幼児たちは3時間以上戸外あそびをしている。調査時期は2月でもつとも戸外あそびには不適当な季節であつたことを考えれば、気候のよい時期に調査すれば、この時間はさらに延長すると考えられる。

団地の子どもの大部分のものは、戸外あそびに親しんでおり、時間的にも十分の戸外あそびをしているといえよう。

第7表は、一日の戸外あそびの回数であるが、大体一

第6表 一日の戸外あそびの時間

年令 戸外あそびの時間	1才未満		1～2才		3～4才		5～6才		7～9才		10～12才	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
戸外あそびしない	4	7.4	3	0.9	3	1.3	—	—	—	—	—	—
～30分	25	46.3	43	12.8	7	3.0	7	6.2	2	2.6	1	5.9
～1時間	14	25.9	109	32.6	25	10.7	11	9.7	6	7.8	4	23.5
～2時間	10	18.5	135	40.3	80	34.4	35	31.0	32	41.6	7	41.2
～3時間	1	1.9	31	9.2	71	30.5	37	32.8	32	41.6	5	29.4
～4時間	—	—	10	3.0	23	9.9	15	13.3	4	5.2	—	—
～5時間	—	—	4	1.2	16	6.9	6	5.3	1	1.3	—	—
～6時間	—	—	—	—	8	3.4	1	0.9	—	—	—	—
～7時間	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
～8時間	—	—	—	—	—	—	1	0.9	—	—	—	—
計	54	100.0	335	100.0	233	100.0	113	100.0	77	100.0	17	100.0
平均	38.1分		76.2分		132.5分		131.4分		118.1分		92.7分	
無回答	81		53		32		19		12		17	

第7表 一日の戸外あそびの回数

年令 回数	1才未満		1～2才		3～4才		5～6才		7～9才		10～12才	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
0回	1	2.1	2	0.6	1	0.4	—	—	—	—	—	—
1回	30	63.9	214	66.3	89	39.6	49	49.5	49	81.6	13	86.7
2回	16	34.0	102	31.6	112	49.7	45	45.5	9	15.0	2	13.3
3回	—	—	4	1.2	17	7.6	3	3.0	1	1.7	—	—
4回	—	—	—	—	4	1.8	—	—	—	—	—	—
5回	—	—	1	0.3	2	0.9	2	2.0	1	1.7	—	—
計	47	100.0	323	100.0	225	100.0	99	100.0	60	100.0	15	100.0
平均	1.32回		1.35回		1.73回		1.60回		1.25回		1.13回	
無回答	88		65		40		33		29		19	

日に1回から2回である。子どもによつては一日に5回というものもあり、3～4才がもつとも出たり入つたりの回数が多く、平均1.73回となっている。

この回数からみて、団地でも一般家庭とおなじように、気楽に外へ出たり家へ帰つたりしていることがわかる。

(4) つぎに1・2階と4・5階の子どもたちの戸外あそびでのちがいをしらべた。団地は4階建、5階建の高層建築が多い。3階以上4階あるいは5階に居住するものが多くなることも、一般家庭とちがった団地の特殊性の一つといえよう。そこで、結果A(1)のところでもふれたが、4・5階に住む子どもの問題を戸外あそびの面か

らみてみることにした。

1～2才ではほとんどおとなのつきそいを必要とするあそびであるし、まず、自分の意志で自分ひとりで外へ出ることはできない。5～6才になつてしまえば、ふつうの子はひとりで外あそびをするし、また、階段ののぼりおりも自由で、4・5階と1・2階の差はそれほど顕著にはつかめないと思う。したがつて、ここでは、3才児をとりあげ、3才児全員を対象として、各階ごとにくわけた。3階のものを除き、4・5階に住む子どもと1・2階に住む子どもの二つのグループにして、その二つのちがいを比較検討することとした。

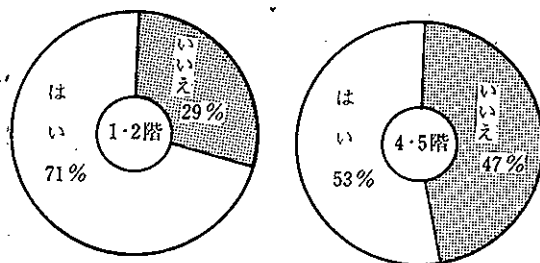
まず、戸外あそびを十分させているかどうかについて

みると、つぎのように4・5階と1・2階のちがいがでている。つまり、4・5階の子どもたちは、1・2階の子どもたちとくらべて、十分戸外あそびをするものが少ないといえる。これをパーセントで図示すると第1図になる。

第8表 戸外あそびを十分させているか

	はい	いいえ	計	
1~2階	40	16	56	$\chi^2=3.519$ .10 > P > .05
4~5階	24	21	45	
計	64	37	101	

第1図 戸外あそびを十分させているか



つぎに、戸外あそびにつきそっていくかどうかを4・5階と1・2階について比較してみる。この結果は、第9表でみるように、やはり、4・5階のものの方がつきそっていくことが多く、1・2階はひとりですぐ戸外あそびに出るものが多くなっている。第2図はその割合を図示したものである。

第9表 戸外あそびにつきそっていくか

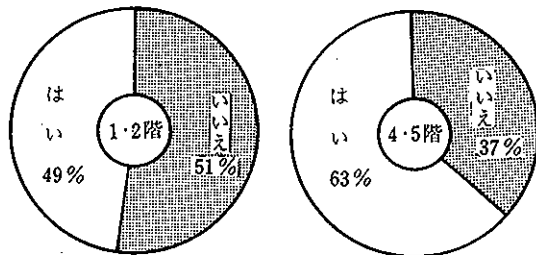
	はい	いいえ	計	
1~2階	28	29	57	$\chi^2=1.8499$ .20 > P > .10
4~5階	27	16	43	
計	55	45	100	

第10表 団地のため、このお子さんのしつけ上よいと思うことがありますか

	1才未満		1~2才		3~4才		5~6才		7~9才		10~12才		計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
あ	94	69.6	332	85.6	226	85.3	120	90.9	74	83.1	23	67.6	869	83.3
な	7	5.2	31	8.0	26	9.8	10	7.6	8	9.0	2	5.9	84	8.1
無回答	34	25.2	25	6.4	13	4.9	2	1.5	7	7.9	9	26.6	90	8.6
計	135	100.0	388	100.0	265	100.0	132	100.0	89	100.0	34	100.0	1,043	100.0

のが、団地の良い点をみとめており(70~90%)、乳児から小学高学年までの母親1,043名のうち、869名(83.3%)のものが、「良い点がある」と答えている。

第2図 戸外あそびにつきそっていくか



さらに、戸外あそびの一日の時間と回数で比較してみると、1・2階の子どもの平均時間は126.48分、4・5階の子どもの平均時間は118.50分となり、1・2階の子どもの戸外あそびの時間の方がながくなっている。また、外へあそびに出る一日の回数は、1・2階の子どもの平均1.81回、4・5階の子どもの平均1.49回で、やはり、1・2階の方が出入りがひんぱんになつている。

<戸外あそび一日平均時間>

1・2階	126.48分	1・2階	1.81回
4・5階	118.50分	4・5階	1.49回

以上でわかるように、4・5階の子どもたちと1・2階の子どもたちの戸外あそびを比較すると、明らかちがいが出ており、4・5階の子は1・2階の子より戸外あそびが消極的であるといえる。

### B. 団地生活としつけ

母親が、子どものしつけや教育のうえで、団地生活にたいしてどう考えているかを調査した。しつけの面からみた団地の良い点、困る点をたずね、また、子どもの性格にどのような影響をあたえると思うかをたずねた。

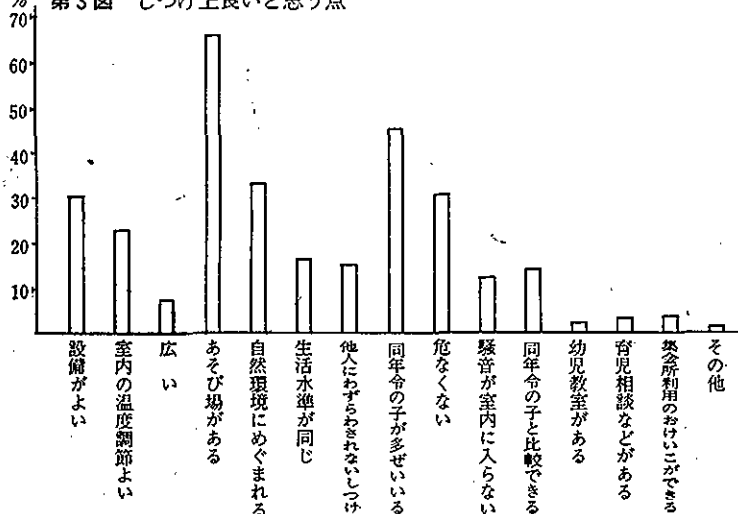
(1)「団地のため、お子さんのしつけ上、良いと思うことがありますか」——の質問についての回答を集計してみると、第10表のようになる。各年令とも大部分のも

つぎに、どんな点をよいと思うのかを、a~n14項の選択肢に印してもらい(該当しないものは「その他」に記述する)、それを整理した。第11表、第3図はその結

第11表 しつけ上よいと思う点

	1才未満		1~2才		3~4才		5~6才		7~9才		10~12才		計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
a 設備が良い	28	29.8	100	30.1	65	28.8	39	32.5	22	29.7	9	39.1	263	30.3
b 室内の温度調節がうまくい	38	40.4	89	26.8	38	16.8	18	15.0	10	13.5	8	34.8	201	23.1
c 広い	1	1.1	29	8.7	16	7.1	15	12.5	6	8.1	1	4.3	68	7.8
d あそび場がある	48	51.1	217	65.4	166	73.5	89	74.2	46	62.2	9	39.1	575	66.2
e 自然環境にめぐまれている	37	39.4	103	31.0	69	30.1	44	36.7	24	32.4	12	52.2	289	33.3
f 生活水準が同じ	8	8.5	54	16.3	39	17.3	25	20.8	15	20.2	3	13.0	144	16.6
g 他人にわずらわされずにしつけができる	16	17.0	43	13.0	36	15.9	16	13.3	17	23.0	5	21.7	133	15.3
h 同年令の子が多ぜいいる	27	28.7	160	48.2	116	51.3	60	50.0	30	40.5	5	21.7	398	45.8
i 危なくない	23	24.5	90	27.1	73	32.3	43	35.8	30	40.5	10	43.5	269	31.0
j 騒音が室内に入らない	20	21.3	46	13.9	22	9.7	11	9.2	11	14.9	1	4.3	111	12.8
k 同年令の子と比較できる	10	10.6	55	16.6	38	16.8	11	9.2	8	10.8	1	4.3	123	14.2
l 幼児教室がある	2	2.1	5	1.5	10	4.4	5	4.2	0	0.0	0	0.0	22	2.5
m 育児相談などがたびたびある	6	6.4	19	5.7	6	2.7	1	0.8	0	0.0	0	0.0	32	3.7
n 集会所利用のおけいごとができる	2	2.1	4	1.2	11	4.9	7	5.8	8	10.8	3	13.0	35	4.0
o その他	1	1.1	3	0.9	5	2.2	1	0.8	1	1.4	1	4.3	12	1.4
団地のためしつけ上よいと思うところがある人数	94	—	332	—	226	—	120	—	74	—	23	—	869	—

第3図 しつけ上良いと思う点



の温度調節がよくできる」「自然環境にめぐまれている」が40~50%でもっとも多い。「設備がよい」「同年令の子が多ぜいいる」「危なくない」「騒音が室内に入らない」などがつぎに多く、20~30%を占めている。幼児期では、1~2才、3~4才、5~6才ともに、ほぼおなじ傾向を示している。つまり、「遊び場がある」が第一位で65~74%を占め、つぎに多いのが「同年令の子どもが多ぜいいる」がそれぞれ50%内外である。また、「自然環境にめぐまれている」「設備がよい」「あぶなくない」が30%内外でこれについている。小学

果である。なお、良いと思う点は一つに限らず該当するものにそれぞれチェックしてもらった結果である。

これで見ると、乳児期では「遊び場がある」「室内

生をみると、低学年はほぼ幼児期とおなじく「遊び場がある」「同年令の子が多ぜいいる」「危なくない」「自然環境にめぐまれている」の順になっている。小学校高学

年になると「自然環境にめぐまれている」が52%で一位となり、「危なくない」「設備がよい」「あそび場がある」がこれに次いでおり、「同年令の子が多ぜいいる」「同年令の子と比較できる」は、ずつと少なくなつて幼児期とことなつた傾向を示している。

団地は、子どもを育てるうえで「あそび場のあること」が良い点であり、また、「同じ年令の子が多ぜいいる」ことが友だちあそびや他の子と比較してわが子を見ることができると良い点であるといえる。しかし、団地の子どもの年令は偏つているため、その団地の子どもの平均年令と非常にずれのある子どもは逆に同年令の子が少なくなつている。また乳児や1~2才の小さい子には「室内の温度調節が良い」「騒音が入らない」など、団地の鉄筋コンクリートの構造も良い条件となつている。なお、「自然環境にめぐまれている」ことは、各年令とも1~2位を占めているが、これは、海に近い藤沢団地の特殊な好条件も加味されていると思う。

(2) つぎに、「団地のため、お子さんのしつけ上、困

ることがありますか」についての結果をみると、第12表のようになつている。ここでは、良い点があると思つているものでも困ることもあれば「困ることがある」に印するようになつている。したがつて、(1)(2)ともに「ある」に該当するものは多くなつている。これで見ると、団地のためしつけ上、困ることがあるとするものは多く、全体の66% (685名)のものが、「困ることがある」と答えている。とくに、幼児期と小学校低学年では70%を超えており、3~4才児は75%となつている。

さて、それではどんな点が「困ること」なのか——これをしらべてみると、第13表、第4図のような結果になつている。何といても、「室内がせまい」が非常に多く第一位で、とくに、乳児期と小学校高学年では70%を超えている。乳児期に、この数が非常に高いのは、1DKという小世帯居住のものが多いためと思われる。また、当団地は3LKなど広い間取りのところもある比較的新しい団地である。したがつて、他の団地では「室内がせまい」はもつと高い数値となることも考えられる。

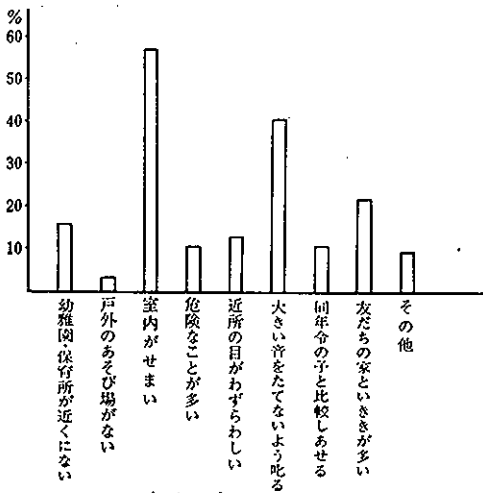
第12表 団地のため、お子さんのしつけ上、困ると思うことがありますか。

	1才未満		1~2才		3~4才		5~6才		7~9才		10~12才		計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
あ	65	48.1	254	65.5	199	75.1	87	65.9	63	70.8	17	50.0	685	65.7
な	21	15.6	83	21.4	40	15.1	29	22.0	18	20.2	7	20.6	198	19.0
無	49	36.3	51	13.1	26	9.8	16	12.1	8	9.0	10	29.4	160	15.3
計	135	100.0	388	100.0	265	100.0	132	100.0	89	100.0	34	100.0	1,043	100.0

第13表 しつけ上困ると思う点

	1才未満		1~2才		3~4才		5~6才		7~9才		10~12才		計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
幼稚園、保育所が近くにない	14	21.5	41	16.1	43	21.6	7	8.0	2	3.2	1	5.9	108	15.8
戸外のあび場がない	1	1.5	12	4.7	4	2.0	2	2.3	3	4.8	0	0.0	22	3.2
室内がせまい	49	75.4	156	61.4	96	48.2	40	46.0	38	60.3	12	70.6	391	57.1
危険なことが多い	4	6.2	33	13.0	26	13.1	6	6.9	2	3.2	0	0.0	71	10.4
近所の目がわずらわしい	11	16.9	30	11.8	25	12.6	11	12.6	8	12.3	5	29.4	90	13.1
大きい音をたてないよう叱る	4	6.2	87	34.3	95	47.7	45	51.7	40	63.5	8	47.0	279	40.7
同年の子と比較し、あせる	4	6.2	36	14.2	21	10.6	7	8.0	6	9.5	1	5.9	75	10.9
友だちの家といきぎが多い	0	0.0	47	18.5	63	31.6	30	34.4	7	11.1	3	17.7	150	21.9
その他	6	9.2	22	8.7	22	11.1	11	12.6	1	1.6	2	11.8	64	9.3
団地のためしつけ上困ることがある人数	65	—	254	—	199	—	87	—	63	—	17	—	685	—

第4図 しつけ上困る点



とくに小学校高学年の子をもつ家庭に、当藤沢団地と他の団地の差は大きいと思われる。つぎに「困る点」とし

て多くあげられているのは、「大きな音をたてないよう叱ることが多い」ということである。これは、乳児をのぞいては50%内外のものが含まれている。ことに、小学校低学年では子どもが活潑で運動量がはげしいためか、64%のものが「困る点」としてこれをあげている。つぎに目につくものとして「ともだちの家にすぐ入りこむ、友だちの家といきぎがはげしい」があげられる。これは幼児期に多くみられ、とくに3~4才では32%のものがこれを「困ること」としている。これは、団地の密集家庭という特殊性と、自分の家と構造がちがわないため友だちの家に、より抵抗少なく出入りするためであろう。

(3) 団地生活のおよぼす子どもへの影響として「子どもの性格は環境にばかり左右されるわけではありませんが、団地で生活すると子どもにどんな影響を与えますか」という質問をした。

まず、子どもの性格に影響を与えると思うか、それとも変りないと思うかをしらべると第14表のようになっている。

第14表 団地で生活すると子どもの性格に影響を与えますか

	1才未満		1~2才		3~4才		5~6才		7~9才		10~12才		計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
変らないと思う	19	14.1	115	29.6	76	28.7	36	27.3	31	34.9	15	44.1	292	28.0
変ると思う	45	33.3	197	50.8	159	60.0	84	63.6	48	53.9	15	44.1	548	52.5
無回答	71	52.6	76	19.6	30	11.3	12	9.1	10	11.2	4	11.8	203	19.5
計	135	100.0	388	100.0	265	100.0	132	100.0	89	100.0	34	100.0	1,043	100.0

1才から9才まで、つまり、幼児期と小学低学年では、「性格に影響をうけると思う」が51%から64%で「変りないと思う」ものより多くなっている。小学校高学年ではこれが半々になっている。一般に、団地の母親たちの多くは、団地生活のため子どもの性格形成に、よかれあしかれ影響をうけると思つているといえる。乳児期では、無回答、「わからない」というものが半分を占め、こうした問題にまだ直面していないことを示している。

第15表は、子どもの性格のどのような面に影響をあたえると思うかをたずねた結果をまとめたものである。これで見ると、各年令とも「社会性が育つ」が1位か2位であり、全体でもつとも多く、36.5%となつている。つぎに多いものは、「競争心がつよい」(33.9%)で、年令別にみてもやはり各年令で1位、2位をしめている。これについて多いものは、「独立心が育つ」、「閉鎖的になる」、「体力が劣る」などであり、全体の16%から20%台になっている。

つぎに、団地生活で影響をうけると思われる性格特徴を、肯定的なものと否定的なものとを対にして考察してみることとした。すなわち、「独立心が育つ」にたいしては「依存的になる」をとりだして組合せるというようにして、肯定面と否定面についての比較検討をおこなつた。第16表は、各年令を合計したもので肯定・否定の比較である。なお、「運動能力が劣る」は印刷上の誤りがあつたため、信頼を欠く回答と思われるので、「運動能力の優劣」についての影響は集計から除外することとした。第5図は第16表を図で示したものである。

第16表および第5図をみると、ここから、母親たちからみた団地の子ども性格の特徴づけをうかがうことができる。体力の優劣や行動の積極性・消極性については母親の意見はまちまちであるが、独立と依存、社会性と非社会性、協調性と競争心、開放性と閉鎖性については明らかなちがいがみられる。すなわち、団地の子どもは、依存的でなく独立心にとむ、社会性がある、しか

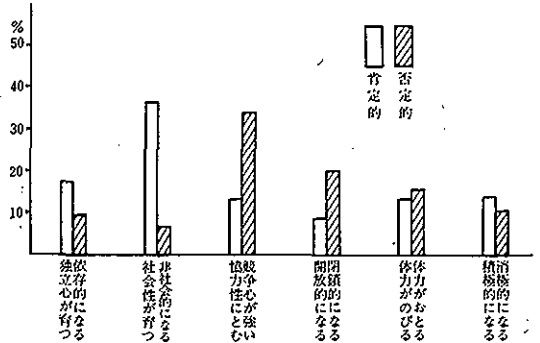
第15表 子どもの性格に与える影響

	1才未満		1～2才		3～4才		5～6才		7～9才		10～12才		計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
独立心が育つ	9	20.0	30	15.2	27	17.0	18	21.4	7	14.6	3	20.0	94	17.2
依存的になる	7	15.6	14	7.1	12	7.5	9	10.7	5	10.4	4	26.7	51	9.4
社会性が育つ	15	33.3	64	32.5	66	41.5	32	38.1	15	31.3	8	53.3	200	36.5
非社会的になる	5	11.1	12	6.1	9	5.7	6	7.1	3	6.3	1	6.7	36	6.7
競争心がつよい	12	26.7	59	29.9	60	37.7	35	41.7	19	39.6	1	6.7	186	33.9
協力性にとむ	7	15.6	29	14.7	21	13.2	10	11.9	6	12.5	0	0.0	73	13.3
閉鎖的になる	12	26.7	44	22.3	29	18.2	14	16.7	8	16.7	3	20.0	110	20.1
開放的になる	3	6.7	16	8.1	18	11.3	8	9.5	4	8.3	0	0.0	49	8.9
体力がのびる	8	17.8	17	8.6	23	14.5	15	17.9	9	18.8	2	13.3	74	13.5
体力がおとる	11	24.4	30	15.2	25	15.7	12	14.3	6	12.5	3	20.0	87	15.9
運動能力がすぐれる	7	15.6	21	10.7	20	12.6	8	9.5	5	10.4	2	13.3	63	11.5
積極的になる	5	11.1	26	13.2	23	14.5	14	16.7	7	14.6	1	6.7	76	13.9
消極的になる	6	13.3	24	12.2	13	8.2	11	13.1	3	6.3	2	13.3	59	10.8
その他	5	11.1	16	8.1	10	6.3	7	8.3	2	4.2	0	0.0	40	7.3
団地のため性格が変わると答えた人数	45	—	197	—	159	—	84	—	48	—	15	—	548	—

第16表

肯定的なもの	実数	%	実数	%	否定的なもの
独立心が育つ	94	17.2	51	9.4	依存的になる
社会性が育つ	200	36.5	36	6.7	非社会的になる
協力性にとむ	73	13.3	186	33.9	競争心が強い
開放的になる	49	8.9	110	20.1	閉鎖的になる
体力がのびる	74	13.5	87	15.9	体力がおとる
積極的になる	76	13.9	59	10.8	消極的になる
計	566	—	529	—	計

第5図



し、その反面、競争心がつよく閉鎖的であるということになる。全体からみると、子どもの性格形成のうえで肯定的な面をあげるものと否定的な面をあげるものとは半ばした結果となつている。

C、母親の集団活動

母親自身が団地で孤立した生活をしているか、それともお互いに共通の意志をもつた生活をしているのかをしらべてみた。

団地では料理や育児、手芸の講習、バザーなどさまざまな催しものがおこなわれている。もちろん、こうした

講習や催しものは、その場かぎりの触れあいにおこなわれることもあろう。しかし、積極的に参加しているものと、まったく参加しないものとは、団地生活へのかまえとして大きな差があると思われる。団地内の催しもの、講習への参加や利用についてしらべてみたのが第17表である。

これとみると明らかなように、年令の小さい子どもをもつ母親は、こうした集りに出席することが少なくなつている。「積極的に出るようにしている」ものは、乳児をもつ母親はわずかに8.9%であるが、小学校高学年の

第17表 団地内での集りや催しものに出席しますか

	1才未満		1～2才		3～4才		5～6才		7～9才		10～12才		計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
積極的に出るようにしている	12	8.9	38	9.8	49	18.5	26	19.7	13	14.6	12	35.3	150	14.4
あまり出席しない	59	43.7	237	61.1	158	59.6	86	65.2	59	66.3	13	38.2	612	58.7
一度も出席したことがない	39	28.9	75	19.3	36	13.6	11	8.3	9	10.1	6	17.7	176	16.9
無 回 答	25	18.5	38	9.8	22	8.3	9	6.8	8	9.0	3	8.8	105	10.0
計	135	100.0	388	100.0	265	100.0	132	100.0	89	100.0	34	100.0	1,043	100.0

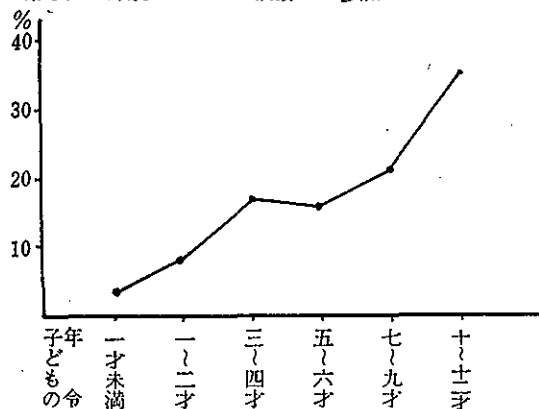
母親になると35.3%と多くなっている。全体でみると、「積極的に出るようにしている」が14.4%、「一度も出席したことがない」が16.9%で、「あまり出席しない」が58.7%になっている。

団地での協力、共通の生活を、より積極的な集団——サークルやクラブ活動を通してしらべたものが第18表に示すものである。第6図は参加しているもののパーセントを子どもの年齢別に図示したものである。

第18表 団地内のサークルやクラブ活動に入っていますか

	1才未満		1～2才		3～4才		5～6才		7～9才		10～12才		計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
参加している	5	3.7	33	8.5	45	16.9	21	15.9	19	21.3	12	35.3	135	12.9
参加していない	103	76.3	342	88.1	216	81.5	110	83.3	66	74.2	20	58.8	857	82.2
無 回 答	27	20.0	13	3.4	4	1.6	1	0.8	4	4.5	2	5.9	51	4.9
計	135	100.0	388	100.0	265	100.0	132	100.0	89	100.0	34	100.0	1,043	100.0

第6図 母親のサークル活動への参加



ここでも、年齢の小さい子をもつほど、母親のサークル活動への参加は少なくなっている。これは第19表の参加しない理由をみれば明らかであるが、「子どもがいるため」に参加できないものが理由の第1位で半分近くになっている。乳児をもつ母親で集団活動をしているものは3.7%であるが、これが小学校高学年の母親になると35%と10倍にふえている。

当団地の子どもの年齢のピークが、現在、乳児から2

才児にかけてであることを考えると、「子どもがいるため」に集団活動のできないものが多く、サークル活動をしているメンバーが他の団地より少ないものと考えられる。また、「転居して間もないので」との理由が「その他」の項の大部分を占めている。これは当藤沢団地が幾段階かの時期にわけて設置されているので入居間もないものが多いからである。したがって、入居年数が加わり子どもの年齢が高くなるにつれて、サークル活動に参加する母親は増加するものと思われる。

つぎに、団地集団を積極的に活用して生活しているものと、孤立して生活しているものとの団地生活にたいする考え方のちがいをしらべてみた。質問紙の間C1、C2から、サークルやクラブ活動に参加しているもの、団地内集会に積極的に参加しようとしているものを積極群とした。ここには、出産前まで、あるいは転居前の団地でサークル活動をしていたものも含めた。第20表は、積極群と消極群の二つに分けて、しつけ上の良い点、困る点、性格への影響への有無をしらべたものである。これで見ると、良い点がある、悪い点がない、性格への影響なし、と団地生活を肯定的にみるものが積極群に多くみられる。しかし、いずれも僅かの差である。

第7図、第8図は、しつけ上のよい点、困る点の内容



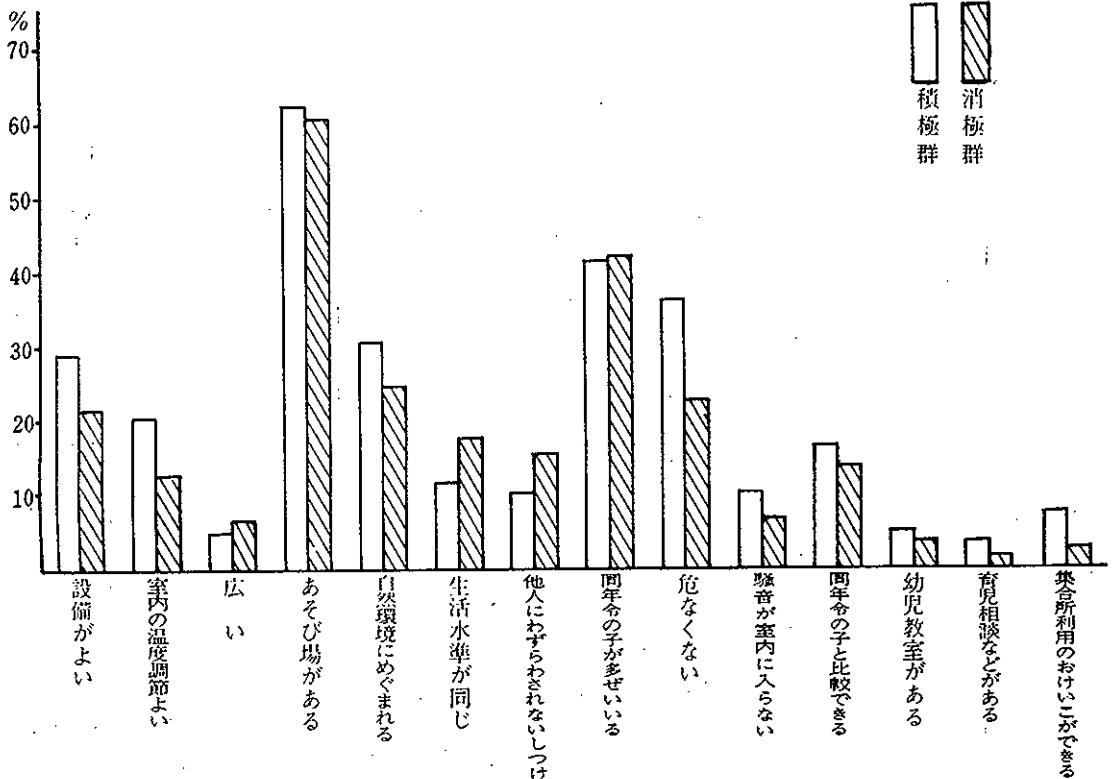
第19表 サークル活動に参加しない理由

	1才未満		1~2才		3~4才		5~6才		7~9才		10~12才		計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
子どもがいるから	52	50.5	220	64.9	105	48.6	30	27.3	12	18.2	0	0.0	419	48.9
勤めていて時間がない	6	5.8	19	5.6	15	6.9	4	3.6	10	15.2	2	10.0	56	6.5
忙しいから	14	13.6	45	13.2	36	16.7	13	11.8	7	10.6	1	5.0	116	13.5
わずらわしいから	10	9.7	27	7.9	21	9.7	14	12.7	11	16.7	2	10.0	85	9.9
興味のあるものがない	15	14.6	68	19.9	57	26.4	30	27.3	19	28.8	6	30.0	195	22.8
その他	6	5.8	12	3.5	17	7.9	15	13.6	9	13.6	6	30.0	65	7.6
無回答	8	7.8	18	5.3	7	3.2	13	11.8	5	7.6	4	20.0	55	6.4
計	103	—	342	—	216	—	110	—	66	—	20	—	857	—

第20表

	積極群 N=79				消極群 N=174			
	あり		なし		あり		なし	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
団地のためしつけ上良い点	69	87.3	10	12.7	148	85.6	26	15.0
団地のためしつけ上困る点	59	74.7	20	25.3	131	75.3	40	23.0
団地のため性格への影響	48	60.8	29	36.7	106	61.0	54	31.1

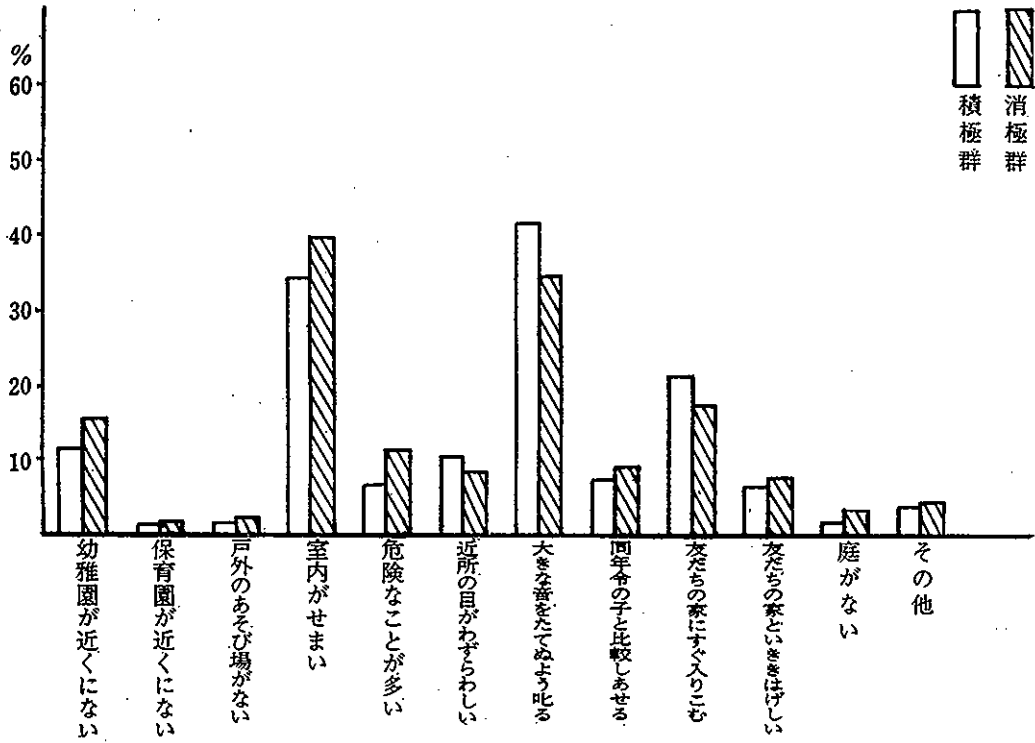
第7図 団地のためしつけ上良い点



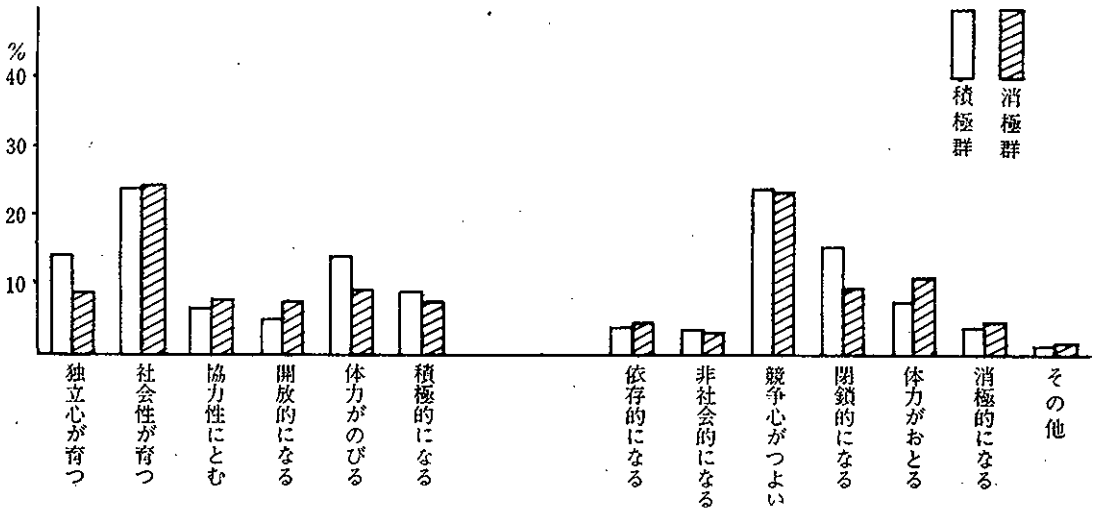
について比較したものである。内容の一つ一つについて $\chi^2$ 検定した結果、積極群と消極群に有意の差のあるものはなかった。ただ、良い点の内容で、消極群の方が多いものは、広い、生活水準が同じ、他人にわずらわされないしつけができる、といったもので、ここに、消極群の意識がうかがえないでもない。性格への影響についても、その内容は $\chi^2$ 検定で有意差のみられるものはなかった(第9図)。

以上でみるように、積極群と消極群とくに異なる点というものがなかった。母親の面接では生活意識のちがいが

第8図 団地のためしつけ上困る点



第9図 団地のため性格への影響



をうけとめることができても、質問紙の結果にはあらわれないものか、それとも居住年数の少ない当団地を対象とした結果、明らかな差がみられなかったのか再検討の必要がある。

### 5. 考 察

今回の調査は、団地の母親サークルの協力もあつて、調査の意図および質問内容が被調査者に徹底し、信頼できる資料を多く集めることができた。

われわれは、団地生活における子どもの生活やしつけについての問題をつかむために、これらの問題を中心とした調査をおこなった。その結果を総括しながら考察をすすめてみたい。

### 1. 戸外あそび

(1) 「戸外あそびを十分しているか」の間に、全体のうち、十分あそぶと答えたものは、十分あそんでいないものにたいして2の割で、倍以上になっている。とくに、5～6才の幼児と小学校低学年の子どもは、「十分戸外あそびをしている」と答えるものが80%以上もしている。団地では多くの子どもたちは戸外あそびを十分しているといえる。

(2) 幼児の一日の戸外あそびの時間は、平均2時間10分、20%の子どもたちは3時間以上あそんでいる。調査時期が戸外あそびに不適当な2月であり、季候のよい時期にはこの時間はさらに延長すると考えられる。

一日の戸外あそびの回数は、1～2回が多く、3～4才児がもつとも出入りがはげしく一日4～5回という子どもあり平均1.7回となつている。

団地の大部分の子どもは、一般家庭とおなじように、気楽に外へ出たり家へ帰つたりしているといえる。また時間的にも十分な戸外あそびをしていることがわかる。

(3) 1～2才の子どもの半数、3～4才の子どものす、5～6才の子どもの20%は、外あそびを十分できないでいる。

外あそびをしない理由として、小さい子のばあいは、「つきそつていかなければならない、つきそいが大変だから」がもつとも多くあげられている。子どもが小さいため危険でひとり外に出せないというのは、団地でも一般家庭でもおなじであるが、とくに、団地のあそび場が危険なためというものが多し。

団地のあそび場で、危険なものは何かをみると、コンクリートであること、自動車を通ること、また、あそび場が大きい子といつしよのため危ないということが多くあげられている。

大きい子の外あそびをしない理由は、当然子ども自身の意志で外あそびを好まないということがでてくる。しかし、小学校高学年、中学生となれば、現在の団地のあそび場の設備では何一つ満たされるものがないことも事実である。

年令とわず外あそびをしない理由の第一は、団地のあそび場の問題である。団地が3～4年の仮り住いでない以上、現在当団地の就学前の幼児1,000名が小学校高学年になるのもそう遠いことではない。理想としては高学

年の子のあそび場もあるにこしたことはないが、現実としては、芝生の一ヶ所を高学年の子のあそび場に解放するとか、現在のあそび場を3歳ぐらいを境に年令の大きい子と小さい子のあそび場を別個にするなどの配慮がなされてよいと思う。

#### (4) 1・2階と4・5階との差

一般家庭とことなる団地の特殊性として、4階5階と高いところに居住することもその一つとしてあげられる。4階5階居住の問題を子どもの外あそびの面から検討した。

対象としたのは3才児である。3才児全員を各階ごとにわけ、3階をのぞいて、1・2階と4・5階の二つのグループについて比較検討した。結果を要約するとつぎのようになる。

#### (1・2階) (4・5階)

・戸外あそびを十分させている。	71%	53%	.10> P>.05
・戸外あそびにつきそつていく。	49%	63%	.20> P>.10
・一日平均時間	126.5分	118.5分	
・一日平均回数	1.81	1.49	

以上のように、3才児の戸外あそびについては、1・2階と4・5階では、明らかにながいがみられる。1・2階の子どもの方がよくあそび、母親のつきそいも少なくなつている。4・5階と高いところに居住している子どもは、1・2階の子どもとくらべ、気軽に外あそびに出ることが少なくなるといえよう。

### 2. しつけや育児上の問題

(1) 子どものしつけ上、団地生活のよい点をみとめているものは、各年令とも大多数(70～90%)になつている。

よい点としてあげているものをみると、幼児や低学年では、各年令とも「あそび場がある」(65～74%)、「同年令の子どもが沢山いる」(50%内外)が1～2位を占めている。高学年になると、「自然環境にめぐまれている」が52%でもつとも多い。

団地は、子どもを育てるのに「あそび場がある」ことが良く、「同じ年令の子が沢山いる」ので友だちあそびができ、他の子と比較してわが子をみられるので良いといえる。しかし、団地の子どもは年令は偏つており、その団地の子どもの平均年令と非常にずれている子どもの場合は、逆に同年令の子どもが少ないということになる。また、乳児や1～2才の子には、「室内の温度調節がよい」「騒音が入らない」など鉄筋コンクリートの構造が良い条件として多くあげられている。なお、「自然

環境にめぐまれている」は各年令ともに、上位にあげられているが、これは団地一般というより、当藤沢団地の海辺に近い立地条件が加味されていると思う。

(2) しつけ上、困る点を見ると、これまた多く、困ることがあるというものが66%にもなっている。具体的に困る点は何かをみると、「室内がせまい」が非常に多く第1位で、乳児と小学高学年はとくに70%をこえる。乳児期のものは1DK居住のものが多いためである。当団地は3LKもある比較的新しい団地であるので、他の団地一般では、入居当時に幼児であつたのが小学高学年になつていたりして、「室内がせまい」という難点は非常に切実な問題と思われる。つぎに困る点として多くあげられているのは「室内で大きな音を立てないよう叱ることが多い」ということである。活動量のはげしい幼児・低学年にとくに多く、60%をこえている。また、3～6才では「友だちの家といきぎがはげしい」が第3位になつている。これは、団地の密集家庭という特殊性と、どこの家も構造がおなじため、自分の家との差が少なく抵抗なしに友人の家に入出入りすることによると思う。

こうしてみると、しつけ上困ることの多くは、団地の構造——せまい、密集しすぎている、音が響く、各戸おなじ構え——からくる問題となつている。

### (3) 性格への影響

団地生活が子どもの性格に影響をあたえると思うものは、幼児期で64%、全体で53%であり、影響ないと思うもの28%の2倍近くである。影響をうける性格のうち、肯定的な面と否定的な面は相半ばしており、母親たちは、よかれあしかれ影響をうけると思っているといえよう。

母親たちからみた団地の子どもの特徴をみると、独立心があり社会性にとむが、その反面、競争心がつよ

く閉鎖的であるということになる。ここに、団地つ子のイメージがうかがえる。

## 3. 母親の集団活働

団地は、共通の意志をもたない集団ともいわれる。密集して居住しながら、個々の生活は扉内に閉じこもり、孤立して、昂ずれば団地ノイローゼにもなる。一方、団地では自治会や共同購入をはじめ集団としての活動も活潑である。そこには、団地集団を肯定的にうけ入れ、よりよい団地生活への積極的意欲がうかがえる。

母親自身どの程度集団意識をもっているのか、また、この積極的なかまえて生活する母親と孤立している母親とでは育児態度にちがいがみられるかどうかをしらべた

団地内の集会や催しものへの積極的な参加と、団地内のサークル活動の二つから集団参加の状況をみたが、いずれも15%に欠ける。子どもの年令によつて明らかなちがいがあり、子どもの年令が大きくなるにつれ、母親のサークル活動者が多くなるといえる(乳児をもつ母3.7%、小学高学年の母35%)。したがつて、当団地は居住年数の浅い関係で、小さい子をもつ母が多いために集団への参加者が少ないといことができる。

団地生活を肯定的にうけ入れ、集団活動をしている母と、孤立した閉鎖的な生活をしている母親とでは、面接して見て、その生活意識や育児態度に明らかなちがいを感ずることが出来る。しかし、われわれの調査では、この両群に差はみられなかつた。

当団地が設置後年数が経ていないため、転居間もないものも多く、また、乳児など年の小さい子どもをもつ母親が多いために、両群の差が出るまでにいたらなかつたのではないかと考えられる。他団地で調査をおこない、この点を再検討してみたいと思う。

## V 団地における母子関係

### 1. 目的

実験的場面をとおして母親と子どもの態度を観察し、一般家庭との比較から団地の母親と子どもの特殊性を把握することを目的とする。本研究は、前年度にひきつづいておこなつたものである。——《昭和39年度 母子衛生に関する特別研究「団地(密集家庭)における母子保健の再検討に関する研究」第5編参照》。

昨年度は、実験場面における母親と子どもの行動や態度それぞれについて、団地と一般家庭の比較をおこなつた。本年度は、一つ一つの行動についての検討ではな

く、あらかじめ行動の類型化をおこない、団地と一般家庭の母親および子どもを、それぞれタイプ別に検討することとした。

### 2. 対象

対象とした団地は、東京都周辺、埼玉県、神奈川県に存在する——松原・竹の塚・浜見平・矢部・武蔵野緑町などの各団地である。

対照群としては、団地の近くにある幼稚園で一般家庭から通園のもの、および都内某保健所来所者、当研究所来所者の一般家庭のものを対象とした。

2才から6才までの幼児とその母親を対象とし、総計482組である(第1表)。

第1表 対 象

年令	群		団 地			一般家庭			計		
	男	女	男	女	計	男	女	計	男	女	計
2才	5	4	9	0	0	0	5	4	9		
3才	30	33	63	28	31	59	58	64	122		
4才	28	34	62	34	43	77	62	77	139		
5才	9	5	14	44	51	95	53	56	109		
6才	3	2	5	49	49	98	52	51	103		
計	75	78	153	155	174	329	230	252	482		

3. 方 法

(1) 母親が、子どもにどう接するか、また子どもがどのような態度をとるか——これをみるために、母親の前で検査者が子どもに課題をあたえ、母と子の行動を観察

する。

(2) 課題および実験手続きは昨年度と同じである。

(3) 行動観察

昨年度は、母親の態度25項目、子どもの態度25項目、計50項目について、それぞれの項目の団地と一般家庭の比較をおこなった。今年度は昨年度おこなった396名の結果から、出現度の少ない項目、判定しにくい項目を除き、類似項目を整理した項目とした。

さらに、今回は、母親の態度を「干渉」と「甘やかし」、子どもの行動を「動揺」と「依存」のそれぞれ二方向から検討できるようにし、タイプ別にみることにした。すなわち、子どもの態度は、「動揺」(母を気にして緊張や不安の行動)、「依存」(「独立」にわけた。一方、母親の態度は、「干渉」と「甘やかし」、「分離」(口出しや手出しをせずに子どもを観察している態度)に分けた。なお、母の行動「干渉」と「甘やかし」は、それぞれ、よりその傾向のつよものに重みをかけるため二段階とした。行動観察項目をあげるとつぎのようになる。

<行動観察項目> 子ども		[動 揺]	[独 立]	[依 存]
1) 入 室		いやがる、いやがるのを抱かれ	さつきと入室	母にうながされ、抱かれ
2) 着 席		立っている	ひとりでかける、母かけさせる	母をよぶ、はなれない、母によりかかる
3) 質 問 に		くり返しきかないと答えない。だまつている	すぐ答える	母の方を向き、テスターをみない
4) 答 え 方		小さい声、語尾消え、母を気にする、答えない	はつきりいえる	母に向つてこたえる
5) 不能のとき		だまつている	わからないという、何かいう	母暗示、母に答を求める、母にやらせる
6) 別 れ る		心細そう、母を追う	気にしない	母を離さない
7) 別れたあと		かえつて積極的	変りない	消極的になる、はなれない
<行動観察項目> 母 親		[干 渉]	[分 離]	[甘 や か し]
		×2		×1
1) 入 室		むりに入れる	うながす	はなればなれ
2) 着 席		口出しする	じつとみている 手でうながす	母の椅子にさつとかける
3) 挨 拶		しつこくさい そくする	かるくうながす	何もいわない
4) 質 問 に		問をメモする	緊張している	ゆつたりみている
5) 態 度 に		はつきりなど 注意する	じつとみている、うながす	何もいわない
6) 回 答 に				みている
7) 答えないとき		おどす、叱る	うながす いらいらする	だまつている
				問をくり返している
				わらう うなずく
				ほめる
				いいかえる 補足する
				鼻をかき、身なり姿勢のせわ
				おだてる

8) わからない、ま ちがい	まちがいを指 摘する	いらいらする	だまつている	はずかしそう に笑う	教える、弁護 する、泣く
9) 子どもに聞かれ	暗示する	いらいらする	自分でやれと いう、だまつ ている	うなずいたり、 首をふったり する	やってやる、 教える
10) 子どもとはなれ る	注意を与えて 去る		さつさと室を 出る		不安そうに去 る、はなれない

4. 結 果

1) 母親の態度

行動観察によつてチェックされたものを、ひとりひとりの各タイプ別に点数化した。「干渉」と「甘やかし」はそれぞれより程度をつよい行動項目を×2としてウェイトをかけた。つまり、一項目で2点となるわけである。

これを、年令別、男女別に集計したものが第2表～第4表である。

母親の甘やかしの行動は、子どもの年令がたかくなるにしたがい減じている。2才児の平均点8.00にたいして6才児1.81である。男女別のあつかい方のちがいをみると、一般家庭、団地ともに4才までは男の子の方に多く「甘やかし」の行動がみられる。

母親が子どもに干渉することを検討すると、「甘やかし」のように子どもの年令による扱い方のちがいはみられない。一般家庭も団地もおなじ傾向であり、子どもの

年令にかかわらず干渉点はほぼおなじく、女子より男子に多くなっている。もつとも、2才児の干渉点は非常に低い。これは、子どもが3才以上になると、母親が子どもの行動にあれこれ注意をあたえることが多くなることのあらわれであろう。

母親が子どもの行動を手助けしたり、口出ししたりせずに、子どもと距離をおいて子どもの行動を観ている態度を「分離」とした。したがつて、第4表にみるように、「干渉」や「甘やかし」とは逆の傾向をもつことになる。すなわち、子どもの年令がたかくなるにつれて母親の分離点はたかくなつており、男の子より女の子の方がたかい。団地と一般家庭とのちがいはとくにみられない。

2) 子どもの態度

子どもの行動記録から、「動揺」「依存」「独立」の別に点数化し、これを年令別、男女別に集計した。結果は第5表～第7表に示すとおりである。

第5表依存点は、子どもが母親に甘え課題を母にやら

第2表 甘 や か し 点

	団 地			一 般 家 庭			計			
	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	
2才	男	5	9.00							
	女	4	6.75							
	計	9	8.00	3.300						
3才	男	30	5.63	3.282	28	6.25	3.460	58	5.93	3.383
	女	33	4.73	3.501	31	5.00	3.445	64	5.14	3.477
	計	63	5.44	3.403	59	5.59	3.508	122	5.52	3.454
4才	男	29	3.28	1.857	34	3.41	3.190	63	3.35	2.663
	女	35	2.94	2.081	43	2.91	2.941	78	2.92	2.360
	計	64	3.09	1.985	77	3.13	3.063	141	3.11	2.629
5才	男	6	3.00	2.828	43	2.21	2.007	49	2.31	2.145
	女	5	2.80	2.786	51	3.00	2.897	56	2.98	2.886
	計	11	2.91	2.811	94	2.64	2.561	105	2.67	2.590
6才	男	3	0.00	0.000	50	1.94	1.954	53	1.83	1.949
	女	2	2.00	2.000	47	1.28	3.892	49	1.80	2.883
	計	5	0.80	1.600	97	1.68	1.977	102	1.81	2.449

第3表 干 渉 点

	団 地			一 般 家 庭			計		
	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD
2才 男	5	0.80	4.190						
女	4	2.75	2.166						
計	9	1.67	1.833						
3才 男	30	3.37	2.728	28	3.50	2.625	58	3.43	2.914
女	33	3.24	2.347	31	2.36	2.502	64	2.94	2.569
計	63	3.30	2.536	59	3.03	2.722	122	3.17	2.631
4才 男	29	3.72	1.833	34	3.09	2.502	63	3.38	2.241
女	35	3.09	3.200	43	3.07	2.800	78	3.08	3.005
計	64	3.37	2.392	77	3.08	2.672	141	3.21	2.693
5才 男	6	3.67	4.854	43	3.16	2.504	49	3.22	2.898
女	5	2.20	2.272	51	2.18	2.135	56	2.18	2.083
計	11	3.00	3.790	94	2.63	2.364	105	2.67	2.553
6才 男	3	3.00	0.000	50	2.44	2.419	53	2.47	2.349
女	2	2.50	2.500	47	1.57	1.700	49	1.61	1.755
計	5	2.80	1.600	97	2.02	2.142	102	2.06	2.133

第4表 分 離 点

	団 地			一 般 家 庭			計		
	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD
2才 男	5	3.40	0.800						
女	4	4.00	2.550						
計	9	3.67	1.828						
3才 男	30	4.60	2.138	28	4.36	1.987	58	4.48	2.069
女	33	5.91	2.042	31	4.94	2.639	64	5.02	2.439
計	63	4.86	2.202	59	4.66	2.369	122	4.76	2.287
4才 男	29	5.31	1.453	34	5.76	2.534	63	5.62	2.243
女	35	6.09	2.319	43	6.07	2.298	78	6.08	2.307
計	64	5.77	2.147	77	5.96	2.400	141	5.87	2.291
5才 男	6	6.17	2.542	43	6.63	1.789	49	6.57	1.908
女	5	6.40	2.154	51	6.35	2.474	56	6.36	2.443
計	11	6.27	2.379	94	6.48	2.191	105	6.46	2.211
6才 男	3	7.67	0.447	50	7.04	2.010	53	7.08	1.954
女	2	7.50	0.500	47	7.83	1.655	49	7.82	1.619
計	5	7.60	0.490	97	7.42	1.892	102	7.43	1.847

第5表 依 存 点

	団 地			一 般 家 庭			計		
	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD
2才 男 女 計	5	3.40	1.356						
	4	2.25	1.786						
	9	2.99	1.667						
3才 男 女 計	30	1.03	1.039	28	1.39	1.879	58	1.21	1.367
	33	1.15	1.432	31	0.74	0.883	64	0.95	1.083
	63	1.10	1.217	59	1.06	1.364	122	1.07	1.568
4才 男 女 計	29	0.83	0.922	34	0.91	1.559	63	0.87	1.323
	35	0.94	1.140	43	0.60	0.794	78	0.76	1.000
	64	0.89	1.025	77	0.74	1.225	141	0.81	1.145
5才 男 女 計	6	1.67	2.209	43	0.37	0.800	49	0.53	1.010
	5	0.40	0.800	51	0.59	1.077	56	0.58	1.122
	11	1.09	1.378	94	0.49	0.970	105	0.55	1.025
6才 男 女 計	3	0.00	0.000	50	0.12	0.032	53	0.11	0.332
	2	0.50	0.500	47	0.21	0.510	49	0.22	0.424
	5	0.20	0.374	97	0.16	0.374	102	0.17	0.415

第6表 動 搖 点

	団 地			一 般 家 庭			計		
	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD
2才 男 女 計	5	1.60	0.800						
	4	1.00	1.000						
	9	1.33	0.901						
3才 男 女 計	30	1.07	1.147	28	1.29	0.716	58	1.17	1.158
	33	1.82	1.469	31	1.48	1.403	64	1.66	1.415
	63	1.46	1.354	59	1.39	1.289	122	1.43	1.330
4才 男 女 計	29	1.24	1.175	34	1.24	1.225	63	1.22	1.153
	35	1.29	1.549	43	1.40	1.356	78	1.35	1.449
	64	1.25	1.360	77	1.32	1.285	141	1.31	1.360
5才 男 女 計	6	1.50	1.257	43	1.23	1.323	49	1.27	1.330
	5	1.20	0.980	51	1.69	1.269	56	1.64	1.241
	11	1.36	1.140	94	1.48	1.308	105	1.47	1.296
6才 男 女 計	3	1.33	0.933	50	0.90	1.100	53	0.92	1.082
	2	1.50	0.500	47	1.11	1.105	49	1.12	1.072
	5	1.40	0.800	97	1.10	1.345	102	1.02	1.095



第7表 独立点

	団 地			一 般 家 庭			計		
	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD
2才 男	5	2.20	0.748						
女	4	3.75	2.773						
計	9	2.89	2.078						
3才 男	30	4.90	1.640	28	4.39	2.145	58	4.39	2.145
女	33	4.48	2.107	31	4.84	2.133	64	4.84	2.133
計	63	4.68	1.910	59	4.63	2.090	122	4.63	2.114
4才 男	29	5.38	1.628	34	5.06	1.970	63	5.17	1.847
女	35	4.94	2.002	43	5.16	1.476	78	5.06	1.738
計	64	5.14	1.852	77	5.12	1.712	141	5.13	1.775
5才 男	6	4.00	1.634	43	6.56	1.587	49	5.37	1.673
女	5	5.40	1.497	51	4.86	1.658	56	4.91	2.134
計	11	4.64	1.718	94	5.18	1.664	105	5.12	1.679
6才 男	3	5.67	0.938	50	6.06	1.105	53	6.04	1.095
女	2	5.00	1.000	47	5.83	1.192	49	5.80	1.187
計	5	5.40	1.020	97	5.95	1.149	102	5.92	1.153

せようとしたり、検査者の方を向かず、母親に向つて答えたりする行動の項目数である。年令別にみると、団地も一般家庭も年令の大きくなるにしたがつて依存することは少なくなっている。両群の明らかな差は年令別、男女別にみてとくにあげられない。

つぎに「動揺」であるが、これは年令による変動はみられない。一般家庭群で6才児に急減しているが団地群では他の年令と大差ない。しかし、団地群の対象が少なかつたため、これについて推論することはできない。むしろ、子どもが6才になると、母を気にしたりする行動が表面に出なくなるということができよう。

子どもの独立点をみると、3才になると急に独立の行

動が多くなり、年令とともに上昇していく。この傾向は対象児の多い家庭群にはつきりあらわれている。団地群は家庭群より独立点がたかく(5~6才は人数が少ないため一応除外して)、とくに男の子の独立点がたかい。

3) 問題行動

母親の行動では、「干渉」と「甘やかし」を合計したものを問題とし、子どもは「独立」をのぞいた「依存」と「動揺」を問題行動として、団地と一般家庭群の比較をしてみる。さきにもたように、子どもの年令によつて各行動の平均点はちがいが出ている。したがつて、各年令を合計したもので検討することはできないし、2才と5~6才は両群の対象に開きがありこれまた総計して比

第8表 問題行動

		団 地 (N=127)		家 庭 (N=136)		t	P	
		M	SD	M	SD			
子 ど も	立 揺	4.91	1.897	4.90	2.022	+0.041	P>0.9	
	動 揺	1.35	1.353	1.35	1.285	0		
	依 存	0.99	1.127	0.87	1.300	+0.794		0.4<P<0.5
	問 題 点	2.33	2.234	2.29	1.967	+0.142		0.8<P<0.9
母 親	分 離	5.31	2.223	5.40	2.470	-0.288	0.7<P<0.8	
	干 渉	3.34	2.615	3.06	2.696	+0.851	0.3<P<0.4	
	甘 や か し	4.26	3.020	4.20	3.486	+0.148	0.8<P<0.9	
	問 題 点	7.60	4.487	7.29	4.942	+0.629	0.5<P<0.6	

較することはできない。それゆえ、3才児と4才児について両群の比較をすることとした。

第8表の下欄に示すように、問題行動は母親、子どもともに団地群の方が多くなっている。各行動別にみても、子どものばあい「動揺」は両群まったく同じで、「独立」と「依存」は団地群にわずかだが多くなっている。母親の行動をみると、「分離」は団地群に少なく、「干渉」「甘やかし」いずれも団地群に多くなっている。とくに、団地群の母親の「干渉」は一般家庭の母親とくらべて多いといえる。

また、3・4才児対象に男女別によるちがいを検討してみる。母親は、団地群、一般家庭群ともに、女の子より男の子の方に「甘やかし」や「干渉」が多く、「分離」が少なくなっている。一方、子どもの態度は、家庭群では、男の子に「依存」が多く「独立」が少ないのに、団地群は逆に男の子に「独立」が多く「依存」が少なくなっている。「動揺」は両群ともに女の子の方がたかくなっている。なお、この性別の傾向は、両群、さらに各行動それぞれ、3才児と4才児は合致している。

一般に母親は、3～4才の子どものために、女の子より男の子の方を甘やかしたり干渉したりすることがうかがえる。子どもは女の子の方がより母親を意識したり緊張するものが多い。一般家庭の子どもは、男の子の方が母に依存的であるのに、団地群の子どもは女の子より男の子の方が独立の行動が多くなっている。(第2表～

第7表)

## 5. 考 察

実験場面を設定し、母親と子どもの行動を観察して、団地と一般家庭の母子関係を比較検討した。その結果を総括するとつぎのようになる。

1) 子どもの年令的発達を土台として、母親の行動、子どもの行動をみると、団地群と一般家庭群と変るところがない。

2) 子どもの行動、母親の行動、いずれも団地群の方が一般家庭群より問題行動が多い。とくに、母親の方にその傾向がつよく、子どもに「干渉」することが多くなっている。

3) 子どもの「独立」については、団地群の方が一般家庭群より優位とさえいえるのに、母親の方の「分離」は一般家庭群より低くなっている。なかでも男の子にたいしてこの傾向が明らかである。

これは昨年度の「団地の子どもは社会性があり独立心があるのに、母親は手助けや口出しすることが多い…」という結果と合致している。

以上の結果は、昨年度の項目別による比較ほど顕著に両群の差としてあらわれていない。行動類型の下位の項目が少なかったことによるためか、行動類型にまとめると両群での差はないのか、さらに検討を要する。